
トリプルクラウン

霧野ミコト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トリプルクラウン

【Nコード】

N0545D

【作者名】

霧野ミコト

【あらすじ】

三つの冠を持つものが居た。一人は魔王の娘。一人はある国の王女。一人は世界最強。魔王の娘は、父を殺された事でその冠を手にした。ある国の王女は、ただ、王家の娘として生まれただけでその冠を手にした。世界最強は、魔王を殺したが故にその冠を手にした。これは、そんな冠を手にした三人のお話。

プロローグ（前書き）

新作です。

完全なファンタジーです。

『復讐と…』の続編でもありますが、これ単体でも十分、成立していますので、わざわざ観なくても大丈夫ですけどね。

とはいえ、しっかりと話を理解した上で読みたい方は、ぜひ『復讐と…』を読んでください。

プロローグ

一人の青年が居た。

家族を殺され、恋人を殺された青年が居た。

一人の少女が居た。

家族を殺された少女が居た。

青年は、復讐を誓い、剣を持ち、立ち上がった。

少女は、復讐を誓い、剣を持ち、立ち上がった。

青年は、がむしゃらに戦った。

その手を、身体を、心を、鮮血の深紅に染め上げながらも戦った。

少女は、怯えながら戦った。

怯えながらも、その手に剣を持ち、戦った。

青年はやがて、復讐を遂げた。

復讐を遂げ、己を咎人として墮とし、深い闇に眠ろうとした。^{おのれ}

少女はやがて、復讐の愚かさを知った。

己の無知を恥じ、復讐をやめ、深い闇に眠ろうとする青年に手を差し伸べた。

青年は、闇の中から一筋の光を手にした。

故に、救う事を願った。

魔の物の王として、先代と同じく、己が一族の罪を一身に背負おう

とする少女を救う事を願った。

少女は、誓った。

青年を救う事を、

悲しみに染まった、幸せを奪われた青年を救う事を誓った。

青年は剣を抜く。

少女を守るために。

少女は剣を抜く。

青年を守るために。

血の繋がるところか種族の壁さえも越えた、唯一の家族を守るため

に。

「殿下、どちらへお出かけなさるおつもりですか」

「何、戦のための武器を調達しに行くだけだ」

少女が笑う。

侍らせた騎士達の問いに答えながら笑う。

それは、覇者の笑い。

絶対的な権力を持つ物の笑い。

「魔の王を殺した男、捨て置くにはもったいないからな」

彼女は、更に笑う。

魔の王を殺した男。

勇者でありながら、咎人に堕ちた男。

その男を、いや、戦の武器を手に入れるため。

そのためだけに、彼女は笑い、歩を進める。

青年は誓った。

少女を守ると。

少女は誓った。

青年を守ると。

「魔の王を殺した男、果たしてどれほどのものか、楽しみだな」

彼女は笑う。

全てをあざ笑うように笑う。

青年の誓い。

少女の願い。

ささやかな思い。

これは、そんなささやかな思いから紡がれたお話。

その未来が救いか、絶望か、それは彼らの選択次第。

彼らの選んだ道の先にある答え。

彼らの辿り付く未来は、どこなのだろうか。

第一話 他称勇者と魔王

うらかな昼下がり。

穏やかなティータイム。

「よう、色男。また、可愛い彼女を連れてデートかい？」

それを邪魔する野暮な男。

彼の名前は、イル。

今、お茶をしているお店のウェイターなんぞをしている。

「いつも言ってますが、妹です」

僕は、そんな野暮な男の言葉をため息混じりに返す。

もう、何度も何度もした会話。

正直、みみたこ状態。

事あるごとに、僕と彼女をくつつけようとする。

お互いの気持ちを考えずに。

「イルさん？お仕事はいいんですか？」

「え？」

真向かいに座ってる少女 アリスがそう言った。

店内からは、店長らしい人のイルを呼ぶ野太い声が聞こえている。

今は昼時。

一番忙しい時間帯に、こんなところで油を売ってたら、それは怒られてしまうだろうよ。

「今、戻りますー!!」

そう言つて、慌てて戻るイル。

「ふふふ」

それを観た僕達は、二人して笑った。

いきなりだけど僕の名前は、ルイ・フェリル。

薬売りなんかをしている。

僕の作る薬は、効果が高く、そのためわざわざ都から買いに来るほ

どの上得意さんがいるほどで、割と暮らし振りは豊かなほう。

そして、一緒に居る妹。

本当は、血は繋がってないし、それどころか種族も違うんだけど、説明が今の情勢じゃ出来ないの、今のところは妹と言うところに落ち着いている。

彼女の本当の名前は、アリス・セナィシス・クウ・ウェリザリウス。今は、強大なので、アリス・フェリルと名乗っている。

そして、魔族。

僕は人間。

だから、種族が違うというわけ。

そんな僕達が一緒に暮らしている理由はただ一つ。

贖罪。

僕は、彼女の父親を殺したから。

彼女は、自分の同胞が快樂のために殺戮を繰り返した事を知らずにいたから。

彼女の父親は魔の者の王。

要するに魔王。

彼は、同胞が行う殺戮を嘆きながらも、止められずにいた。

故に、魔の者の王として、代表として戦い、その命を散らした。

その思いを継ぎ、彼女もまた、魔の者の王として戦い、死ぬつもりでいた。

そして、僕は、それを救いたいと思った。

僕が魔王を殺したのは、復讐のため。

家族と恋人を殺され、怒りと悲しみのはけ口を求めた僕は、魔族を憎み、復讐する事を誓った。

それが、彼らの望みかどうかも分からないまま、復讐する事を誓った。

そして、最後の到着点は、魔の者の王だった彼を殺すことだった。

魔王を殺せば、終わると思っていた。

けれど、魔王を殺した後、その手に残ったのは、何もなかった。

ただただ虚しくて、空虚だった。

そして、何も変わらなかった。

不安はあった。

いや、おそらく、気づいていたんだと思う。

魔王を殺したところで、何も変わらない事は。

魔王を殺しても、他の魔族は、己の快樂のために人を殺すであろう。
平和には決してならない。

自分が行った事。

それは、決して無駄だとは思わない。

けれど、だからと言って、意味があったとも思えない。

結局は、僕の我儘で、自己満足。

自分の悲しみから逃げるための口実だった。

そして、その口実が原因で、一人になった彼女。

いくら、同胞が原因で起きた事で、その責任を取らなければいけない立場だったとしても、僕が彼女の居場所を奪ったことには変わりはない。

だから、これもまた、僕の我儘で、自己満足だが、彼女を救いたかった。

守ってやりたかった。

「はあああああつっ!!」

気合の一閃。

彼女の全身全霊の一撃。

けれど、それを僕は、あっさり紙一重で交わすと、足を引っ掛ける。
ど派手にこける彼女。

「ううー、また負けました」

これで、彼女の172連敗。

通算は1勝172敗。

とはいえ、その1勝も、不戦勝のような物。

僕が、わざと負けた、と言った物だし。

最初の勝負は魔王城だった。

それが、出会いだったわけでもあるのだけれども、魔王を殺した僕は、虚無感を抱えていた。

生きる気力も意味も何もなく、ただその身を血で汚して、虚しさだけしかなかった。

だから、死ぬつもりだった。

魔王城にある塔の屋上から飛び降りようと思っていた。

そのときに、彼女は現れた。

温室でぬくぬくと育てられた彼女は、当然実戦経験どころか、剣を持った事さえなく、身体は震え、戦うということ自体に恐怖感を抱きながらも、復讐のために剣を持ち、僕と対峙した。

戦いのイロハも知らぬ彼女。

ただ、恐怖からの脱却のために剣を持ち、僕に突進して来た。あまりにも稚拙な攻撃。

だけど、僕は、避けなかった。

絶望から逃れるべく死を望み、彼女の復讐を叶えるために避けなかった。

それが、彼女が持つ唯一の1勝。

とはいえ、彼女はそれを1勝とは考えていないだろう。戦いとも呼べぬものだったのだから。

その後、腹に剣を突き立てられた上に、自分から投身自殺を図ったのだが、彼女に救われ、今こうしているわけなのだが。

「まあ、それでも、世界最強だからな。そう簡単には勝てないさ」
そう言いつつも、自分の言った言葉に内心で苦笑する。

世界最強。

そう、僕は確かに世界最強。

魔王を倒した僕は、自分から名乗り出れば、『勇者』と呼ばれ、貴賓並の扱いを受けるだろう。

下手したら、王族の仲間入りだってありえたかもしれない。

けれど、僕自身はそれを望まなかったし、なりたくもなかった。他人から観たら、それは偉業なのかもしれないだろう。

忌み嫌われ、憎しみの対象である魔族。

その王を倒したのだ、偉業以外でもないだろう。けれど、僕には違った。

魔族を、魔王を殺した事。

それは、僕にとっては、ただの純然たる罪だった。

僕は、正直、自分でも数え切れないほどの魔族を殺した。

深い深い奈落の闇に突き落とされてしまったほど殺してきた。

そのおかげ、とでも本来は言うべきだろう、今、目立って何かを起こす魔族は居ない。

それを行ってきた全ての魔族を、と言っても過言じゃないほど、ほとんどの魔族を殺した。

手は、身体は深紅に染まり、心はどんどん淀んで行く。

今、自分がしている事が正しい事なのか、分からなくなるほど、苦しかった。

だからこそ、それを偉業だとは思えなかった。

特に、魔王城にいる魔族達を殺したときなんかは、そう思った。

彼らは、何一つとして、殺されるような事はしていなかった。

ただ、魔王を守っていただけだった。

けれど、僕は、ただ魔族と言う理由で殺した。

何の罪もない彼らを殺したのだ。

それを罪と言わずに何と言うのだろうか。

罪としか、言えぬだろう。

例え、誰かが、それを否定しようとも、僕はそれを罪だと思い続ける。

だから、それを誇る事なんて出来ないし、ましてや、自分を『勇者』だなんて思えない。

ただ、力だけを持つ、愚かな『世界最強』。それだけだ。

「さあ、そろそろ夕飯にしようか？」

見上げた空は茜色に染まっている。

隠れるようにして住んでいる僕達の家は山の中。

日が落ちたら一気に冷える。

風邪を引かないためにも、早めに入っておいたほうがいいだろう。それに、僕自身、動き回って腹ペコだ。

旅をしているときは、一食どころか、二三日、何も食べなくても、多少水分さえ取っていれば、我慢できたけれど、今じゃもう無理。素直に朝昼晩とお腹が空く。

まあ、あの時は気が昂っていたし、無意識の内にそういう感情をセーブしてしまっていたんだろう。

そういう意味では、僕も多少大人しくなったんだろう。

逆に言えば、鈍った、という事なんだろうけれど、もう争い事なんてせずに、静かに暮らす分には、それでちょうど良いだろう。

彼女を鍛えているのも、もしもの時のためで、そのしもだって、起こる可能性はかなり低く、彼女自身の気を紛らわせるためではない。

ただ守られるだけではなく、自分自身と、それと誰かを守れる力を手に入れるために、そのために彼女は剣を持っている。

「今日は、寒くなってきたから、パンとクリームシチューだよ」

席に座っている彼女の前と自分の前に器を並べると、僕も自分の席に座る。

元々がお姫様だった彼女は当然家事は出来ない。

彼女の希望もあって、少しずつ教えてはいるが、まだまだ先は遠く、やはり僕が家事の一切を仕切っている。

「ふふ、おいしいです」

差し出したクリームシチューを彼女は幸せそうに食べている。

魔王城に居た頃は、もっといいものを食べていたはずだろう。

きっと僕が食べた事もない程のおいしいものばかりのはずだ。

けれど、そう言っている彼女は、本当に幸せそのもので、嘘偽りは何一つとして見えない。

だから、彼女がそう言ってくれるのが嬉しくて、幸せで、僕自身も

食べているものが何倍もおいしく感じる。

だけど、それは決して特別なことじゃなくて、むしろ懐かしい事。まだ、家族と恋人が生きていたとき。

家族や恋人と食べた食事は、いつも美味しくて、幸せだった。

その場の空気が暖かくて、穏やかで、本当に楽しくてしかたなかった。

それを、今、僕と彼女は感じているんだろう。

家族としての繋がりを、血や種族の壁を越えて、当たり前のように感じているんだと思う。

「ごちそうさま」

彼女は、そう言って、食器を片付ける。

片付けは彼女の仕事。

まだまだ夕飯を任せるのは足りないけれど、それぐらいは十分に出来る。

そして、その間に、僕は繕い物。

修練で破れた服なんかを繕わなくちゃいけない。

これも、まだまだ彼女には任せられない。

針仕事も、これはこれで難しいわけだし。

ほつれている裾や、破れたズボンを、ささっと繕っていく。

これは、旅の時に何度もやってきたことだから、手馴れた物。

お金持ちの貴族や、『職業勇者』だったら、いくらでも新しいものを買えただろうが、ただの村人出身の僕はいつも貧しく、食べるものにも困っていたぐらいだから、当然、服も完全にだめになるまで、着続けないといけないわけだから、当然の仕事だった。

「むー、ホント、ルイさんって、何でも上手ですよねえ。なんだか、自分が女の子として恥ずかしいですよ」

いつの間にか、洗い物を終えて戻ってきたアリスが、後ろから覗きこんでいた。

「まあ、これは慣れだから仕方ないよ。アリスも、慣れたら、出来るようになるさ。だから、慌てずに一つずつ覚えていこう?」

僕はそう言いながら、そんなアリスの頭を撫でる。

器用な彼女は、どんどん吸収して行っている。

いきなり言った事を全て完璧にこなしてしまうほどではないが、しつかりと聞いて、ちゃんとそれを理解をしている。

だから、いざ実践となっても、慌てず騒がず出来るし、分からない事はしつかりと聞いて、少しずつながら、自分の物にしていく。生徒としては、なかなか優秀だろう。

「それは、分かってるんですけど。でも、やっぱり、いつまでもルイさんにおんぶに抱っこじゃ悪いですし」

そして、常に忘れない向上心もあるのもいい。

本当に優秀な生徒だ。

僕にはもったいないぐらいの。

「その気持ちだけで嬉しいよ。さあ、繕い物も終わっ^たし、そろそろ眠ろうか？」

繕い終わ^{った}彼女の服をしま^うと、立ち上がり、ベッドルームに向かう。

今日も一日お疲れ。

さつさと寝て、休養をしないといけないだろう。

特に、いつもいつも頑張^{いたわ}って身体を鍛えている彼女なんか、身体を労^{いたわ}ってやらないといけない。

「うゝ、なんだか、はぐらかされてるようにしか思えませんけど、仕方ないですね。寝ましょうか」

彼女もしぶしぶながら付いてくる。

まあ、彼女自身も自分が疲れている事を分かっているんだろう。

良く寝て良く食べて良く動く。

それが強くなる一番の近道だと言う事ぐらい彼女だって分かっている。

決して無理はしない。

二人して同じベッドにもぐりこむ。

元々、一人用の小屋だったから、ベッドは一つしかない。

買ったそうかとも思っただけで、やめて置いた。

やめた理由は、いくつかある。

いくら、多少豊かだとしても、金持ちというわけでもない。
使えるお金は少ない。

だけど、何よりも、一番大きな理由は二つある。

「おやすみなさい」

彼女は、そう言っでぎゅっと抱きついてくる。

彼女は、夜、一人では眠れない。

彼女の住んでいる世界は、環境も何もかがらりと変わってしまった。
っている。

それが不安になり、恐怖と変わり、そして悪夢となる。

うなされ、起きて、恐怖で眠れなくなる。

だから、こうして、一緒に眠っている。

一人ではなく、二人であれば、悪夢も見ないし、怖くもないし、不
安もない。

安心して眠れる。

そんな可愛い妹の頭を撫でる。

今の僕のたった一人の家族。

大切な妹。

僕と彼女が同じベッドにいるもう一つの理由。

それは……

「おやすみ」

僕はそう言っで、彼女を抱き締め返す。

やっぱり、僕も一人が寂しいって事。

誰かの温もりを感じていたい。

そういうことなんだ。

第一話 他称勇者と魔王（後書き）

とりあえず、プロットも何もありません。

完全に行き当たりばったりで書く気満々の小説です。

ですが、まあ、見捨てないでやってください。

後、とりあえず、更新は……

たぶん、不定期です。

なので、毎日更新、なんていうのは期待しないでくださいねえ。

第二話 師匠な勇者と弟子な魔王

「また、戦争か」

広げた新聞の第一面には、国同士の戦争について書かれていた。

懇意にしている情報屋に頼んで、都の新聞を一日遅れでもらっているんだが、ここ最近では、戦争関連の話題が多い。

魔王がいなくなり、平和になった世界。

人は、魔物による恐怖から解放された。

けれど、それもつかの間の平穏。

今まで居た共通の敵がいきなり消えた事で、行き場の失った暴力が暴走し始めた。

つくづく人間と言う生き物は醜くて仕方ない。

いや、人間自体が醜いんじゃない。

欲に支配された人間が醜いんだ。

麓にある街を見てみれば分かる。

柄の悪い輩は多少いるが、それでも、それも僅かで、それ以外は、

ホントに人のいい人達ばかり。

こうして、僕がここで静かに暮らせているのは彼らのおかげでもある。

彼らは欲に取り憑かれてはいない。

取り憑かれているのは、貴族だろう。

そして、己の欲のために、僕達のような下々の人間が苦しむ事になる。

いつもそうだ。

得をするのは貴族達で、僕達平民はいつも苦しみばかり。

僕らばかりが苦勞をする。

魔族からの被害だって、僕達平民がほとんどで、貴族なんかは、下級貴族に多少の被害があった程度で、それ以外はのうのうと平和に暮らしていた。

だから、国も本腰をいれなかった。

力の強い魔術師や職業勇者は、常に貴族を守るためだけに、使われていた。

自分の保身のためだけに、彼らを使っていた。

そして、そこから、あぶれた者達が、外に出て、平民を守っていた。それだって、数が限られているんだから、都市部が大半で、僕が昔住んでいたような田舎の小さな村には、来る事は全くなかった。

次々と田舎の小さな村は潰され、助けを求める声は、ただ虚しく響き渡るだけだった。

そして、今度もそう。

戦争が起きる。

また、税が上がるだろう。

軍備に使うための金を集めるために、僕達平民から搾り取るのだ。

そうやって貴族はますます肥え、平民はますます飢えていく。

止まらない貧困の連鎖。

「ルイさん、せめて笑いましょう?」

読み終えた新聞を畳み、机の上に置くと、アリスがそういう。

「なら、アリスが笑っていないとな?じゃないと、僕は笑えないよ」
「ただ、僕以上に悲しそうな顔をしている。」

彼女も王。

種族は違えど、王であることには変わりはない。

だからこそ、その選択をしている事を悲しんでいるのだろう。
同じ王として。

「そうですね。私達には生きてる限り、拭えない罪がある。そして、それを償うために生きている。だから、笑わないといけないんですよね?」

「ああ、僕達は強くないといけない。強く生きて、たくさんの人を守らないといけない」

僕達は力を持ってしまった。
大きな力を持ってしまった。

その力はきつと、脅威で危険。
力はきつと新たな力と争いを呼ぶ。

既に、魔王を殺した勇者として、僕の名は、世界中に広がっている。
そして、その人智を越えた力を持つ僕を求める声もまた、広がっている。

兵器としての力を求める声が。

魔王さえも殺した力。

その力を手にした国家は、それだけで脅威になる。

その化け物染みた力を止めるには、一国の軍隊では止められない。
だから、求めるのだ。

世界の覇者になるために。

血眼になって探すのだ。

でも、僕は自分の力をそんなもののために使うつもりは毛頭ない。

僕は、もう決めたんだ。

自分の犯した罪のためを償うために生きると。

生きて、たくさんの人の命を救うと。

僕の力は大きすぎる。

それゆえに、きつと歪みが出る。

だから、一つの国に、一つの組織にその身を置けば、その途端に世界のバランスが崩れる。

そうなれば、きつとたくさんの人の血が流れるだろう。

どんな綺麗事を言っても、望んでも、きつと血を流さずにはすまない。

けれど、それを僕は望まない。

くだらないと笑われるかもしれない。

もったいないと言われるかもしれない。

だけど、それが僕の思い。

ちっばけだろうとなんだだろうと目の前にある幸せを守る。

自分とアリスと麓の街を守る。

それが、僕に出来る償い。

死ぬまで続けないといけない罰。

「だから、今日も稽古お願いしますね？」

彼女は立ち上がると、壁にかけてある棒を手取る。

さすがは魔王と言ったところか、魔法に関しては、すぐに才能を開花させたが、体術はからつきしなので、今はそれを重点的に鍛えている。

もちろん、十分今の彼女でも相当な力を持っているんだけど、それで満足はしていない。

更に上を求めている。

力不足で後悔しないために。

どんなに強くても意味がないのだ。

守れなければ。

僕達は一生逃れられない。

強さを追い続けること、戦うことから。

「でやあああ！！」

彼女の渾身の一撃。

気合の切り落としの一撃。

なかなか鋭い。

魔法によって能力を向上されているから、多少地力の低さを誤魔化してはいる。

けれど、それでも、十分な鋭さ。

「ふっ！」

それを、僕は紙一重で避ける。

早さも鋭さも十分。

けれど、それでも、僕を捉えるには足りない。

回避後、反転して無防備な背中に一撃。

回避など及ぶはずもなく、あっさりとその一撃は入り、崩れ落ちる。

「絶対的強者相手に、自身の渾身の一撃を叩きこもうとするのは間違いない」

倒れこんだ彼女に手を差し出し、起こす。

それに合わせて、今回の勝負の解説。

「攻撃だけに集中して、後先考えずに渾身の一撃を放つ。戦術的に言えば、あまり褒められた事じゃないけれど、どう足掻いても勝てない場合は、賭けに出るのは間違いないし、ただ、一撃を入れる、それだけの事を考えるなら、むしろ理想だろう」

僕と彼女の間には、かなりの差がある。

まずは地力。

基本的な筋力と体力は僕の方が上だし、技術面においても、技のスピード、キレ、威力も上。

圧倒的な差がそこに存在する。

そして、頭。

確かに、彼女は魔王の娘として、かなりの英才教育を受けてきて、知識レベルは相当高い。

逆に、平民出の僕は、必要最低限の読み書きしかできないけれど、この場合はそれは問題ではない。

ここで必要なのは戦闘に関する頭。

今でこそ、僕は『世界最強』なんていう恐ろしくくだらない称号を持っているが、旅に出た頃の僕は、恐ろしく弱かった。

ただの田舎の小さな村の農民だった。

当然、戦闘経験なんてないし、訓練でさえやった事はなかった。

もちろん、最初の内は、身体を鍛える事に専念したし、いきなり実戦をしようなんて思わなかった。

それでも、ある程度鍛えて、頃合を計って実戦を試みたら、即座に気付かされた。

ただ、鍛えるだけでもダメで、もちろん、技を磨いてもダメ。

しっかりと身体を鍛えると同時に頭も鍛えて、状況にあった闘い方をしなければならぬ。

そうでなければ、生き残れない、と。

だから、身体を鍛えつつ、実戦を踏みながら、頭も鍛えた。

先ほども言った通り、確かに彼女は僕よりも知識レベルは高いだろ

う。

けれど、戦闘に関する知識の方は、僕の方が高い。

この二つだけで、既に僕と彼女の間には、歴然の差がある。

そして、その上、復讐として、数え切れないほどの魔族を殺した。

それを誇る積もりはないが、結果として、その経験が、更に僕を有利にする。

数多くの修羅場をくぐってきた。

城内で安穩とした生活をしてきた彼女が、それに届くだけの修羅場をくぐってきているはずもない。

経験と場数の差。

これも、バカには出来ない。

直感が身を助ける事もあるし、経験の蓄積し、頭の中でデータ化する事で、相手の行動を読む事さえも可能となる。

相手の行動を読む、先読みが出来れば相手の攻撃に対して、いくらでも対処できるし、自分自身が先手を取る事も可能。

圧倒的な地力の差がある場合は、そこまで大きく作用する事はないかもしれないが、力が拮抗しているとき、または、多少不利な状態でも、それをうまく利用できれば、勝つ事だって可能になる。

実際、僕が魔王に勝てたのは、先読みが出来たからこそでもある。

頭の方は、ほぼ同等だったが、地力は、やや彼の方が上だった。

いくら、僕が死ぬ気になって鍛えようと、やはり、どうしても魔王には届かなかった。

とはいえ、元々、人間と魔族の間には、地力にそうとうな差があるのに、並ぶまでではないが、それに近いレベルに押し上げられたというのは、十分評価できるのではある。

けれど、それでも、やはり足りなかったのには違いなかったし、実際劣勢で、かなり苦戦した。

それでも、最後に勝てたのは、経験の差だった。

僕は復讐として、自分でも数え切れないほどの修羅場をくぐり、殺してきた。

それに比べ、多少の戦闘経験はあれど、それでも圧倒的な地力を持つて、相手を叩き潰してきた彼は、ぎりぎりの闘いなんて物は、あの時が初めて。

いくら、彼が僕よりも強いと言ってもそれは紙一重、実際の上部では、状況次第ではどう転ぶかは分からない。

現実には、僕は、直感と先読みを駆使して闘い、勝利を得た。

それだけ重要なのだ、生死を賭けた闘いの中では。

そして、それだけの経験を持つ僕とそれを持たない彼女。

勝負にならないほど、あっさりと決まってしまうのは、当然だろう。だからこそ、長期戦にするのは無意味。

長引かせたところで、ギリ貧どころではないし、僕と彼女ほどの差があれば、彼女が例えば長期戦を狙ったとしても、あっさりと勝負は決まってしまうだろう。

どう足掻いても、僕と彼女では勝負にはならない。

だからこそ、唯一可能性としては、はつきり言つて零とは言わないが、限りなく零に近い確立ながらも、勝算が残る方法が、攻撃一点のみに集中しての捨て身の渾身の一撃。それしか残っていない。

だから、それは間違いではない。

「それでも、まだまだ能力不足だな」

間違いではないが、残念ながら、今の彼女では、その行為自体も無意味。

今の彼女の能力では、どれほど攻撃一点の身に集中して捨て身の渾身の一撃を打つても届かない。

あまりにも差が大きすぎる。

「何度も言っているけど、今は焦らずゆっくりと基礎を作って行く？僕だつていきなり強くなったわけじゃない。じっくりとまず身体を作ってからだったんだよ？」

だからこそ、今の彼女には、基礎が必要なんだ。

僕だつて、最初はずっと基礎ばかりだった。

悲しみや憎しみなんか狂いそうになりながら、心が暴走して基礎をすっ飛ばして、自分の感情のままに剣を振るって、殺してやりたいという気持ちを抑えながら、鍛えていた。

「うゝ、でも、基礎ばかりやっても、戦えないじゃないですか」

「基礎がなくても、こうしてあつさり負けてるだろう？」

「うっ」

彼女の気持ちも分からないでもないが、現実はそのものだ。

どんなに実戦をこなしても、地力がなければ、勝てやしない。

「それに、眼に見えて分かりにくいかもしれないけど、鍛えたら鍛えた分だけ強くなるんだよ？ 少しずつだけだね」

それこそ、下手に技術だけを叩きこまれた相手ぐらいなら勝てるぐらいには強くなる。

何事も基礎が大事。

基礎がある程度できてから、初めてその一つ上のステップに行ける。

「というわけで、バーベル上げをしようか」

そういうわけで、彼女の前に、どんとバーベルを置く。

僕が昔使っていた奴で、重さは30キロほど。

「うっ……」

彼女が見て分かるほど嫌そうな顔をしている。

まあ、彼女が基礎を嫌がる理由はこれだろう。

基礎訓練は地味な上にきつい。

彼女だって、最初はこれよりも軽かったが、バーベル上げを意気揚々となっていた。

けれど、彼女自身が、どんなに決心しても、そうやすやすと続けられるものではない。

特に、目標が曖昧だとなおさらだろう。

僕自身、これを使っていたときは、復讐と言う明確な目標があったけれど、今の彼女は、大切な人を守るため、という目標はあるが、自分で言うのも恥ずかしいが、今の彼女には僕が全てである。

こっちに來て、長いが、それほど大切だと思える人は僕以外いない。

その僕だって、彼女に守られなければならないほど弱くはないし、僕を彼女が守っている姿を彼女自身思い描くのも難しい。

そうになると、目標は曖昧になり、やる気は出ないし、意思是弱くなる。

特に、彼女はいくら魔王とはいえ、幼すぎる。

魔族は人間に比べれば長寿な生き物で、歳を取るのが遅いとはいえ、今の彼女は、可愛らしい外見に相応しく、僕よりもずっと若い。

今年で14歳。

それほど、子供というわけでもないが、大人というわけでもない。不安定なところはあるだろうし、元々王城で安穩として暮らしてきていたのだ。

彼女がどんなに魔王としての責務を果たし、罪を償おうと決心したところで、やはり若さは出る。

誘惑に負けてしまう。

とはいえ、僕自身、それを否定するつもりはないし、それでいいと思っているけれど、それでも、ここは年長者として、自分が発した言葉に対する責任を取らせる意味を持って、厳しく接しなくてはいけない。

「はい、頑張つて行こう、ファイト」

それに、やはり、今は力が必要だろう。

戦争が始まりつつある。

もしもの可能性はずっと低いと思っていたが、どうにも甘かったらしい。

人間同士での戦争が始まるのは予想していた。

けれど、僕という兵器を求める国家はないと考えていた。

確かに、僕を手に入れば、それだけで十分に脅威になるだろう。

今更、謙遜したり、自分の力を過小評価をするつもりはない。

よほどの事がない限り、確実に勝利を手にする事は難しくはないだろう。

けれど、僕を手に入れるには、そうとうな労力が必要になる。

僕が地位や名誉、権力、金にさほど興味がない事ぐらいは、ある程度理解しているはずである。

もし、そんなものがいるのなら、とつくの昔に堂々と『勇者』として表舞台に立っているはずである。

けれど、実際はそれをせず、ひっそりと隠居しているのだから、そんなもので釣れるとはまさか考えていないだろう。

そうなると説得するのは、かなり難しいと考えるはずである。

だからと言って、力付くで手に入れようとしたとしても、一国の軍隊と同等の力と言うのは言いすぎだが、国の軍の一個中隊ぐらいの戦力ではある。

それを力付くで、しかも生きたまま捕らえる必要がある。

かなりの戦力が必要になるし、捕らえたとしても、力付くなのだ、素直に頷くとは到底思えない。

そうなれば、戦力を割いた分だけ損をする。

それを考えると、あまりにもリスクが大きすぎる上に、あまりにも分が悪い。

そのような状況下で、僕を必要にするとは思えなかった。

けれど、現実には、僕を求めている国の声が数多くある。

その全てではないだろうが、いくつかは僕を探そうとするだろう。

もちろん、僕だってそう簡単に見つかるつもりもないし、見つかったとしても戦争の道具になるつもりもない。

けれど、僕と一緒にいるのだ、きっと彼女を巻き込んでしまう事は必至。

だからと言って、別れるのは論外だし、彼女だって承知しないだろう。

僕には僕の、彼女には彼女の誓いがある。

だから、もし見つかった時、その時は、せめて彼女には自分自身を守るぐらいの力は持っていて欲しい。

僕自身がどんなに強い力を持っていたとしても、力は万能じゃないし、絶対的でもない。

必ず守れるという事なんてありえない。

彼女自身が自分の身を守られるくらい強くなるしかない。

その手伝いも、『彼女を守る』内の一つのはずだ。

ただ、分かりやすく守る事が全てではない。

こういう形の守り方だってある。

「うゝ、無理!!」

何度か、あげようとして失敗、それを繰り返して、ついに断念。

まあ、50回連続は確かに、今の彼女にはきついだろう。

一度二度あげるのは、苦ではないだろうが、それを連続で何度もとなると、苦しくならないはずがない。

モチベーションが高ければ、もう少し粘るだろうが、目標が曖昧な彼女にそれを求めるのは難しいだろう。

もちろん、今の現状を事細かに教えてやれば、彼女のモチベーションも多少なりはあがるだろうが、未だ確証がないのに、余計な事は言えない。

言って彼女を不安にさせたくないし、それに何より、昔の僕のように無理をして欲しくはない。

もし、いい方を間違えて、彼女を追い込ませるような事になった拳句、僕がしたようかなり無茶のあるやり方で身体を鍛えるような事をされては、目もあてられないし、既にそれをやった僕が止められるわけもない。

助言ならいくらでも出来るが、その人の行動が他人に迷惑をかけていない限り、僕には止める事なんて出来ない。

それこそ、僕が復讐と言う名の虐殺をして回っていたようなことではない限りは。

だからこそ、言えない、言うわけにはいかない。

「はいはい、んじゃ、次はランニングね？さあ、行こうか」

「お、鬼!？」

バーベルを片付けると、今度は重りを彼女に背負わせる。

今度は、これを担いで、山頂まで行って帰ってくるランニング。

重りの重さは10キロ、山頂までは20キロほど。

要するに40キロのマラソンと言う事。

まあ、彼女が僕の事を鬼と呼ぶ気持ちは分からないでもない。

「はいはい、鬼ですよ、鬼ですから、厳しく行きますよ」。はい、スタート。制限時間は日が落ちるまで」

けれど、そんな事は躊躇せずに、スタート。

自分でも、かなり無茶な事をさせているのは十分理解している。

僕自身も、このトレーニングレベルに達するまでには、それなりに時間を要した。

まあ、二ヶ月ほどで、マスターはしたけれど。

やはり、モチベーションの高さは、大事と言うことだろう。

「ふええ」

彼女は既に、半泣き。

まあ、モチベーションがそれほど高くないんだから仕方がないだろう。

けれど、心は、彼女の言う通り、心を鬼にしくちやいけない。

自分勝手だろうが、なんだろうが彼女には強くなってもらう。

「うう、死んじゃう。絶対に死んじゃうよ」

結局、制限時間内に到着できず、ペナルティの筋トレをする羽目になった彼女は、稽古終了と同時に、その場に倒れこむ。

まあ、なんだかんだ言っても頑張っている方だろう。

実際、僕がやっている稽古は、はっきり言って非人道的。

どこの国の軍隊だろうと、それをやらせたら、どんなに粘っても、数日でやめていくだろう。

バーベル上げなんかは、まだ多少は楽だろうが、ランニングはそうじゃない。

急傾斜な上に、舗装されてはおらず、更にコース上には、たくさんのトラップと地獄のアトラクションがある。

一兵卒の軍人じゃ、続けるどころか走破することも不可能だろう。それを、制限時間内に到着できなかったとはいえ、しっかりと走破し、その上、なんだかんだと文句を言いつつも続けているのだ、そんな彼女を頑張っていないとは言えない。

求める物を高くしているから、彼女が随分情けなく映るかもしれないけれど、それは勘違いと言う物で、実際の彼女は本当に良く頑張っている。

「はいはい、その程度の事で死んでたら、僕もとっくの昔に死んでるって」

とはいえ、昔の僕に比べればやはり、雲泥の差ではあるが。

朝起きて、バーベルを持ち上げた後、山頂往復ランニングをして、更に筋トレして、お昼の小休止、その後、もう一度山頂往復ランニングをした後、今度は100キロのバーベルを連続100回上げして、30キロの重りを付けた剣で素振り300回など、数え切れないほどの無茶をしてきた。

それに比べると、まだまだ可愛いものだろう。

まあ、それをさせる気も、毛頭ないんだが。

「……化け物」

「はいはい、化け物で結構。さあ、さつさと浴室に行って汗を流しておいで。出てきたら、マッサージをしてあげるから」

彼女の言う通り、自分でも自分がどれだけ化け物染みているのかは良く分かる。

そんなものに、彼女をするつもりはない。

あくまでも、ぎりぎり厳しいレベルで止めておく。

まあ、そのぎりぎりもたいがいありえないほど厳しいのだが、この際、それは気にしないでおく。

彼女には化け物にはなって欲しくない。

彼女は、今、どんどん可愛らしくなっている。

初めて会ったときとは見違えるほど、性格が丸くなっている。今では、普通に街にいるその年頃の少女と全く変わりはない。

周りの誰もが、彼女がまさか魔王だなんて思っているはずもなく、普通の女の子として接している。

僕はそれでいいと思う。

未来はきつと、辛いだろう。

絶対に、魔王としての責務を果たさないといけない時が来るだろう。けれど、せめて、そのときが来るまでは、普通の女の子でいさせてあげたい。

どんなに苦しい訓練を受けた女の子だったとしても、最後の一步を踏まなければならない少女。

僕が、復讐のために、その一步を越えたがために、化け物に成り下がってしまったような事を彼女にはさせたくない。

狂ったように鍛え、闘い、殺した。

そんな事を、彼女にはさせたくない。

「んじゃ、行つて来ます」

着替えを持った、彼女が浴室に向かう。

それを、確認すると、早速夕食の準備。

今日は、彼女の稽古に付き会ってたから、当然夕食の準備なんか出来てはいない。

彼女のペースにあわず、さっさと帰っていれば、いくらでも作れてはいたが、さすがにそれは忍びない。

いくら、ここらいたい僕が僕のフィールドとは言え、全く安全と言うわけではないし、彼女自身稽古で疲れている、何が起きるか分からない。

一応、名目師匠としては、目を離すわけにはいかない。

それに、今こうして、彼女が汗を流している間にいくらでも作れるから、別段慌てることでもない。

「ふむ」

食料庫の中身を見る。

「今日はごちそうとしますかね？」

思わず、笑いを一緒にこぼしながら、そう呟く。

彼女は本当に頑張ってる。

特に、今日はあっさりばっさりと負けた上に地獄の猛特訓。かなり疲れているだろう。

多少労ってやるのも悪くないだろう。

むしろ、労ってやらなくちゃいけない。

飴と鞭は上手に使い分けないとね。

厳しいだけじゃ、嫌われかねないし、踏み出させかねない。

せっかくの同居人で、家族。

失うにはもったいなさすぎるし、誓いにそむく。

「うっし、腕によりをかけて、作りますかね」

なんて言った所で、僕の腕と材料じゃ高が知れている。

だから、ここは別のところに力を入れておこう。

もちろん、いつも以上に豪勢な物を作るけど、それ以上に、もっと

大切なものを加える。

僕から彼女への愛情。

なんて、ちよつと気持ち悪いかな。

でも、それはそれで悪くないだろうし、言わなければ分からない。

彼女も頑張ってることだし、僕も頑張りますか。

たった一人の家族のために。

「で、情報はどれくらい集まった？」

「勇者レイオン・カスリムは、今は、ルイ・フェリルと名前を変え、地方の田舎街ルクイドの傍にある山の中で、薬売りとして生計を立てつつ、少女と暮らしているそうです」

「その情報の信用度は？」

「かなり、高いようです。都でも薬師のルイ・フェリルの名前は有名ですから、いくらでも情報は集まりました。彼自身、かなり高い知識を持ち、それに合わせて複雑なエンチャントをしているようですし、その薬師としてレベルは、この国の医局の者よりも高いよう

です。このレベルの人間はまず居ません。勇者レイオン・カスリムでなければ」

「そうか」

思わず、笑いが漏れる。

どうやら、手に入れた情報の確実性は高いらしい。

勇者が医療に詳しい事は、まずない。

特に、下々の人間が蔑称で言う『職業勇者』ならなお更だ。

そんなものを覚える暇があつたら、自分自身を鍛えるか、貴族に媚を売るかだ。

医療の事なんかは、その専門に任せておけばいい。

そう考えるのが大半だ。

けれど、勇者レイオンは違う。

自分自身を鍛える事だけでは飽き足らず、たくさんの人間を救うために、独自に薬を開発したりと、医療にも力を入れていた。

その技術は、なんとも情けない話だが、この国の医局の専門家以上のものを持っている。

本当に、化け物だ。

魔王を殺すだけの力を持ち、人を救う医療の技術も持つ。

これを化け物と呼ばずになんと呼ぶ。

だが、それが、今回は、その化け物に取っては、仇になったようだ。多少、質を悪くすれば良かっただろうが、どうせ偽善者面で正義感を振りかざして、救える命はいくらでも救うなんていうお粗末な心構えで、どんどん作つたのだろう。

自分の居場所を見つけてくださいと言っているような物だ。

「なら、そのルクイドとやらに行くか」

ならば、行ってやらなければなるまい。

そこに、兵器があるのだ、使わない手はあるまい。

兵器は使ってこそ意味がある。

戦争のために使ってこそなのだ。

「ふん、勇者レイオン・カスリム。どれほど甘い人間なのだろうな」

まあ、人のためだと言って、医療にまで手を染める勇者だ、砂糖菓子レベルの甘さの人間には違いなだろう。

第二話 師匠な勇者と弟子な魔王（後書き）

ようやく、三人目が出て来ました。

出て来ましたけど、すっごく性格悪そうです。

てか、悪いです。

この三人目も一応主要登場人物。

まあ、後からどんどん増えてくるかもしれませんがね。

ちなみに、これは、多少シリ阿斯が入りますが、基本出来るだけコメディっぽくします。

なので、あしからず。

第三話 勇者特製トラップ地獄??

眼下に広がる田園風景。

そして、薄汚い格好をした人間。

それは確かに王宮の者が言うゴミクスと変わらない。

彼らは言う。

『あれは人間ではない、ただ、我々の道具だ。我々に尽くすためだけのいる道具だ』

それを肯定するつもりはない。

けれど、否定もするつもりももちろんない。

確かに薄汚いそれらは、ゴミクス同然の価値しかないのだろう。だが、それらによって生かされている私達もまた同じ。

ゴミクスと対して変わらぬ価値しか持たない。

「くだらない、行くぞ」

けれど、そんなことを考えたところで無意味。

そんな事を考える暇があったら、如何にしてあの男を説得するか、それを考えるべきだ。

数々の褒章や出世の話を拒み、一人隠れて隠遁生活。

いや、確か、同居している少女がいるらしい。

妹とは言っているが、既に、家族は全員魔族によって殺されている。恋人もだ。

旅の途中で浮いた話も何一つなかった。

旅に出た当初ならいざ知らず、旅の最後の方なら確実にいくらでも女が集まってきていたというのに、誰一人として手をつけなかった。あの男自身、女の狙いを分かっていたのもあるだろう。

冒険者として有名になれば、確実に貴族からの声が掛かる。

実際、数多くの貴族からの誘いの声がかかっていた。

そうなれば、巨万の富とまではいかないにしろ、裕福な暮らしが出来る。

それを狙って、女は群がっていたのだ。

それに気付かない男ではなかったのだろう、全く見向きもしなかった。

しかし、おそらくそれだけではない。

いや、むしろ一番の理由は違う。

復讐。

その一言に尽きるだろう。

なんとも、愚かな話だが、それだけのために力を付け、魔王を倒し、それ以外には興味を示さなかったのだろう。

まあ、どちらにしろ、女には全く手を付けなかった男だ、ルイ・フェリルは。

けれど、その男の傍にいる娘、名前は確か、アリス・フェリル。

さて、真実は如何なるものか。

「きゃっ」

不意に何かに足を取られ、無様に地面に這い蹲る。

服は泥だらけ。

「殿下、大丈夫ですか!!」

わらわらと集まってくる騎士。

ようやく状況が読めた。

とりあえず、こけたのだろう。

一応、山道を歩くのだから、汚れても良い服を着てきたが、想定範囲以上の汚れ具合。

というか、泥だらけ。

「構わん、気にするな」

無様な姿を晒し、思わず出してしまった年頃の娘のような声に、苛つきながらも心内に押し込め、立ち上がる。

ザバー

すると、いきなりの局所的な大雨。

いや、違う、水を被っただけだ。

「あの、殿下？」

今度はこわごわとうかがってくる騎士。

命に別状がない事ぐらいは分かっているだろう。

けれど、彼らが心配している事はそんなことじゃない。

私の心内だ。

これだけ無様な姿を晒させられたんだ、不機嫌にならないわけがない。

しかも、ただこけて、泥だらけにするのと、ただ水をかぶせるだけ、だなんていう、人をどこまでも舐めきったトラップなのだ、腸が煮えたぎるほどの怒りを感じても仕方がない。

「気にするな、先へ進むぞ」

けれど、それでも、私は王族の娘。

こんな程度の事で、みすみす心内を表に出すような事は「ぶっ」

いきなり、目の前に現れた木の板に顔をぶつける。

頭がくらくらする。

「殿下!」

「静まれ!」

大丈夫だ、これぐらい、これぐらいの事で、私の心は揺らぎない。

『おめでとう、これで三回連続トラップに引っかかったね。そんなドジな君には、クイーン・オブ・ザ・ドジの称号をあげよう』

いきなり、そんな声が、辺りに広がったとしても、気にしない。

落ち着かせる。

落ち着いている。

『ちなみに、このトラップに引っかかるのは、幼児ぐらいだから』

落ち着け。

落ち着くんだ。

落ち着け……

べしゃ。

不意に、頭に落ちてきた泥。

水をかぶったおかげで、多少拭えた泥が、再度付く。

ぶちっ。

「ふふふ、はははは、あはははは、上等よ、やってやるっじゃない！！」

「そろそろ来る頃だな」

席を立ち、愛剣を手取る。

この小屋に着くまでには、いくつも子供だましみたいなトラップが山ほど仕掛けられている。

基本的には、アリスの修行用なんだけど、一応外敵用でもある。

結界のような物を張っていれば、外敵が入ってきてても分かるけれど、広範囲となるとやたらと魔力を食うから、実はあんまり効率的とは言えない。

むしろ、原始的なトラップを仕掛けておいて、そのトラップが発動した時に、こちらになんらかの信号を送らせる方が、よっぽど効率的。

まあ、僕自身の趣味でもあるんだけど。

やっぱり、日々の潤いも必要だろう。

最初のトラップに引っかかってから、ずっと監視用のカメラも飛ばしているんだけど、どこの国の貴族かは知らないが、ことごとく引っかかっている。

なんというか、そこまでドジな奴も初めてみる。

最初の頃こそ、挙動不信にも見えるぐらい慎重に周りを見てたのに、ふと気を抜いたと思った瞬間、ずっこけて、そこから後は雪崩式。

次々引っかかって、挙句に逆ギレ。

まあ、貴族なんて物は面子を気にする生き物だから、ここまでバカにされたら、そりゃ、もちろん、怒らない方が難しいだろうが、一応女性なんだから、もう少し淑やかにしてもらいたい。

「僕は行くけど、アリスはここで留守番ね？もしかしたら、殺さないといけないかもしれないから」

「……はい」

立ちかけた彼女に、そういつて牽制する。

彼女自身も僕の傍にいたいのだろうが、ここから先は、遊びじゃない。

おそらく、アリスの正体まではばれていない。

けれど、直接会うとばれる可能性もある。

もちろん、人と変わらない姿をしているんだから、ばれる可能性だって低いけど、それでも出来るだけ危険は回避しておくべきだろう。

それに、やはり、彼女には、僕が誰かを殺すところを見せたくはない。

僕自身、出来るだけ戦わずに終わりたい。

けれど、それが無理なら戦うしかないし、最悪殺す事まで考えないといけない。

だけど、彼女はまだ、それに慣れていない。

あれから、剣の稽古はしている。

けれど、一度として実戦はさせていない。

これから、させるつもりはない。

過保護と思われるかもしれない。

けれど、僕は彼女に手を汚して欲しくない。

そのまま綺麗なままで居て欲しい。

外に出ると、小屋全体に結界をはる。

これで、侵入されることも、僕の攻撃の余波を受けることも、そして、彼女が出てくることも出来ない。

「ようこそお客人。随分薄汚れていますね？」

それを確認してから、向き合う。

最後の最後で木のつるにつるし上げられている貴族の女性と騎士達。

「これが、客に対しての礼儀なのかしら？」

「まあ、招かざる客に対しての礼儀なら、適当なんじゃないんでしようか？」

そう言いつつ、拘束を解く。

「死にさらせ！！」

途端に、女とは思えない口汚い言葉を吐くと、突進してくる。

貴族の令嬢と言うものに夢見すぎたのだろうか。

いや、でも、アリスは、淑やかだったような気がする。

ひょいと回避すると、足をかける。

「きゃ」

可愛らしく悲鳴をあげると、ずっこける。

おそらく、相当の美貌を持った女性なのだろうが、今のその姿は泥だらけで見れたものじゃない。

「こ、ころ、殺してやる！！」

再度の突進。

やっぱり、口汚い。

これが、本性なのだろう。

元々、誰の下にも付く気はないが、こんな人格なら尚更考えられないな。

再度、ひょいと回避すると、今度は腹部に拳を一撃。

ホントは、女の人の腹部を殴る事なんてしたくないんだけど、この際は仕方ない。

一発で、後遺症なく気絶させるにはこれが一番なのだ。

頭部だと下手したら死ぬし、下手しなくても、ねじがぶっ飛ぶかもしないし。

だからと言って、魔法を使うのも魔力の無駄遣い。

今の時代省エネなんだよね。

無駄なく生きていきましよう。

失神してる女の首根っこを掴んで、引きずるように小屋の中に入る。

「お、おい、殿下が連れ去られたぞ！！」

「くそ、どうする、殿下の御身が危ない！！」

「……てか、その前に俺らはどうするんだ？」

「……放置？」

騎士達を放置して。

まあ、小屋自体小さいから入りきらないから仕方ないんだけど。

「とりあえず、ものすつごく薄汚れて汚いから、洗ってあげて？しばらく起きないだろうし」

中に入ると、気絶しているデンカとやらをアリスに渡す。

たいしたレベルじゃないとは思っていたが、あまりにもお粗末過ぎる弱さなので、アリスと対面させたところで気付かないだろう。

「はい、分かりました」

頷いた彼女は、デンカを引きずって浴室に消えていく。

どこか、嬉しそうだ。

なんだろう、もしかして、アリスにはそういう趣味でもあるのだろうか？

別に彼女の恋愛にそれほど口を出すつもりはないが、種族を越えるのはいいとしても、性別を越えるのはどうかと思う。

ちゃんと教育した方がいいのだろうか？

そこらへんは、かなり考えどころだが、今はとりあえず横においておこう。

今は、あの女の立場の事。

デンカと呼ばれていたが、おそらくは殿下。

となると、一国の王女、いきなり大物の登場だ。

家紋が大鷲だったところからも、おそらく今住んでいるこの国の王女。

まあ、王族にそこまで詳しくないから、誰なのかまでは分からないが、それでも、多少面倒な相手ではあるだろう。

それでも、やっぱり、手を貸すつもりは毛頭ないけれど。

もし、力付くでもと考えるなら、やはり殺すしかないだろう。

殺し殺されの世界が嫌でここに隠居しているのに、結局、僕はどこまでも、付き回される。

それが、僕の罪なのだろうが、やはりやるせない。

僕はただ目の前にある幸せを守りたいだけ、それだけなのに。

「ベッドに寝かしつけきました」

「ありがとう」

浮かびそうになった悲哀の表情をすぐさまに打ち消す。

アリスに心配かけかねない。

彼女を労い頭を撫でる。

子供扱いかもしれないけれど、以外と彼女もこれを喜んでくれる。母親はすぐに死に、父親も公務で会う事がままならなかった。

後宮で呑気に暮らしていたとは言え、それでも寂しかっただろう。親に甘えられなかったのだから。

だから、今、少しでもいいから、甘えさせてあげたい。

「今日は、これからの稽古も無理だから、今日は夕食にしよう」
キッチンに立つと、夕飯の準備をする。

これから、また、一気に状況は変わるだろう。

だからこそ、せめて、今、この瞬間だけは、平穏であって欲しい。そう願う。

「つつつ、あの男、思いつきり入れられたわ。もう少し女の扱い方を考えなさいっていうのよ」
よろよろと起き上がる。

焦点がまだ定まっていないせいか、視界はぼやけているようにも見える。

「おはよう。と言っても、夜だけどね」

まあ、割かし、完璧に入ったんだから、仕方ない。

ダメージが回復するには多少の時間がいったのだろう。

ちなみに、騎士達は、送り返した。

いつまでも、外につるして風邪でもひかれたら、たまったものじゃない。

「身体の調子はどう？一応、回復魔法はかけておいたし、どぶねずみのように小汚かったから、アリスに頼んで、湯浴みはさせておいたけど」

「……どぶねずみ……小汚い……」

かなり、カチンと来ていているようだが、事実だから仕方ない。

「で、時間の無駄だから、本題に行こうか。君の目的は何？」

それに、いまいち彼女の方は理解しているとは言い難いが、一応こつちのほうの立場としては上なのだ。

下の物がいちいち上の物のすることに腹を立てて文句を言うものじゃない。

それこそ、そんなもの貴族世界では常識のはずだ。

「何故、まだ、戦争なんかをしていない、ヘイムダルの王女がわざわざ僕のところまで来た？」

それに、ずっと気になっていた事。

何故、戦争をしていないヘイムダルの王女が、僕を必要とするのか。自国も戦争に参加しようとしても言うのだろうか。

確かに、今、ヘイムダルの傍にある二国間で戦争が起きている。

かなり長期戦となっており、国は疲弊しており、今つつけば、やり方次第では二国を取りこめるだろう。

けれど、戦争には建前が必要だ。

何故、戦争に参加するのか、その明確で正当な理由が。

「確かに、今は戦争はしていない。けれど、議会の決議で戦争に参加が決定した。その勝利の確実性のためにお前が必要なのだ」

「建前は どうする？ まさか、何も言わずにしかけるつもりか？」

そうなれば、他国からの笑い物だ。

一気に世界の敵とみなされ、他国の攻撃目標になる。

「建前なんぞ、いくらでも、作れる。なんなら、自国付近でいつまでも行われる紛争が、自国の経済に影響を与えているため、それを殲滅せんために参加するとも言えいいわけだからな」

「その程度で……」

確かに、二国のせいで、多少経済に悪影響が出ている。

ちようと海を背にし、眼前には戦争している二国。

国境付近は治安が悪く、陸路で行商に来るものはまずいない。

海路もあるが、戦争をしている国周辺の海もまた、治安が悪くなり、海賊なんてものも出てくる。

当然、ヘイムダルの王都付近では、そんなことはないが、遠くなればなるほど、治安は悪くなる。

そのため、わざわざ危険を冒してまでこよつとする行商は少ない。そのせいで、物流が遮られ、貿易が出来ず、多少経済が疲弊している。

しているが、

「そんなもの、貴族にしか関係ないはずだ。民には無関係だろう？」
そんなものに直接打撃があるのは貴族ぐらいで、多少の経済の疲弊、というよりも、貿易商の疲弊は、平民の生活にはほとんど関係ない。
「そうだ。だが、それでも、理由には十分事足りる。それが、政治だ」

まだ、うまく身体が動かせないのだろう、身体を起こしたただけの姿でそういうが、けれどそれでも彼女の貴族然とした姿は変わらない。
「目の前に今格好の獲物がある。それを手にしない手はなかるう？」
笑う。

目の前にいる女は笑う。

見下すように。

あざ笑うかのように。

「くだらない」

だから、僕も笑う。

見下すように。

あざ笑うように。

「結局、自分の欲のために動いているだけだろう？ だったら、それを他人を巻き込むな。戦争をやりたければ、勝手にやれ。けれど、僕達を巻き込むな」

彼女の価値を、欲を否定はしない。

僕にはそれをする資格も権利もない。

ただ、笑っただけだ。

「僕は、君達を否定することも肯定することもしない。戦争がしたければすればいい。僕達に火の粉が降りかかるようだったら、対処

はするけれど、そうでないなら、どうでもいい。勝手に好きなだけすればいい」

人それぞれ望む物は違う。

それを否定したって意味はない。

僕はただ自分が守りたい物を守りたいと思うから、だから、守るためならいくらでも戦う。

僕は僕と僕の大切な人が幸せならそれでいい。

僕にはそれぐらいしか守れないから。

そして、彼女達は、僕とは違って、多くの物を望むんだろう。

たくさんものを望むんだろう。

元々持っているものがたくさんあるから。

腐るほどたくさんものをもっているから。

だから、もっと欲しがる。

そういうものなのだろう。

それは、僕から見たら、憐れなものだけれど、彼女達には違うのだろう。

だから、否定はしない。

「帰ってもらおうか？そちら側のいい分は十分に分かったからね」

それでも、やはり受け入れられない。

僕の信条とは反する。

だから、交渉は決裂。

まあ、最初から交渉する気も毛頭なかったんだが。

第三話 勇者特製トラップ地獄?? (後書き)

久しぶりの更新です。

遅くなってすみません。

しかも、次回もいつになるか分からない。
そんな感じです。

うーん、忙しいってたいへんだww

第四話 勇者と情報屋（前書き）

遅ればせながら、新年あけましておめでとございます。
どうぞ、今年もよろしくお願いします。
さて、遅くなりましたが、続きます。

第四話 勇者と情報屋

麓の街の表通りを一本中に入った道のやや奥まった場所。そこには、ちよつとこじやれた喫茶店がある。

普段の僕は、表通りにある、イルのいる店に行くのだけれど、今日は特別。

純粹にコーヒープレイクするために、来たわけじゃない。

むしろ、喫茶店なんて言う物はおまけで、その店の奥にある物に用があつて僕はここに来ている。

「僕の動向がばれていた、君が喋ったのか？」

店の奥にある隠し扉の中にある一室。

そこに、僕と、一人の男が、卓を挟んで座っている。

彼の名前はセイル。

僕が懇意にしている情報屋であり、その業界ではかなり名が通っている。

「もう、来たのか？仕事の速いな。まあ、それだけ焦ってるんだろ
うな」

そして、困った事に、僕の事を喋ったのも彼。

当の本人は悪びれることもないが。

「それだけ、彼女の立場は危ういのか？」

けれど、それを責める積もりはない。

いくら名が通った情報屋とは言つても、所詮は平民。

貴族に逆らう事はもちろん、王族となるとまず不可能だろう。

特に、彼女のように王位継承権争いの渦中に居る人間に逆らうのは愚の骨頂だろう。

「ああ、再び戦乱の時期に入った以上、王宮は強い後継者を求めている。けれども、彼女は女だからな。状況はあまり思わしくないみたいだな」

全ての女が弱いわけじゃない。

宮廷魔術師や職業勇者なんかに女はいくらでもいる。

けれど、王宮ではそんなことは関係ない。

男か女か。

力の優劣はまず間違いなく男の方が上。

例え、彼女が長子でも関係ない。

一応、王位継承権は長子に優先権はあるが、絶対的なものではない。場面に合わせて臨機応変に変わる、と言えば聞こえはいいが、実質はそのときの王宮やその周りにいる閣僚や貴族達の思惑次第で決まってしまう。

そんななんとも血生臭い世界。

「だから、僕を求めたわけか。自分自身には力がないから、強い力を持った武器を持つ事で力を顕示しよう。困ったものだ」

けれど、巻き込まれた方としてはたまったもんじゃない。

迷惑以外なんでもない。

「まあ、勇者たる者の定めだな。俺が言うのも変な話だが、業を背負う人間は、本人の気持ちに関わらず、罰が降り注ぐからな」

「確かに、君には言われたくないな」

セイルとて、人の秘密なんてものを売り物にしている辺り、褒められた職業ではない。

彼もまた、望まぬ罰が降り注ぐ。

「で、配分はどうする？かなりの謝礼をもらったんだろう？」

だから、これ以上責めるような事はしない。

それをするのは僕ではない。

それに、彼に協力を求めた以上、そこから情報が流れるのは覚悟しているし、そのときの契約とて、しっかりとっている。

「さすがは、王族だな。平民なら一生遊んで暮らせるぐらいの金をもらったよ。貴族はケチだから、出し渋ると思ったが、必死なんだろう羽振りが良かったよ」

これは、意外。

貴族は、良く情報屋を使う。

権力や金のためなら、なんでもするという輩だっている。

そういうやかからは、えてして情報屋から情報を集めて、敵対する相手の弱みを握り、潰そうとする。

そのため、より質や信頼性を高い情報を求めるが、その割に羽振りには悪い。

表向きに使う金は派手に使うが、裏向きの金の財布の紐はしっかりと結び、値切ったり、踏み倒したりする輩だっている。

そして、それがまかり通る世界なのだ。

とはいえ、その代わり、そういった輩は、その後取引してもらえなかったり、敵対関係にある人間に情報を流されたりと、最終的には破滅への道を歩む羽目になるのだが。

それに比べると、彼女はまだましな部類だろう。

ことごとく罠に引っかかり、口上もぱつとしないし、あっさりと引き返した辺り、小物っぽく思っていたんだが、意外にこれはおもしろいかもしれない。

まあ、だからといって、彼女に協力する気はやはり毛頭ないが。

「で、配分だが、9：1でどうだ？」

「僕が9か？」

「俺が9に決まってるだろう？」

まあ、あえて聞いてみたのだが、やはり、僕が1らしい。

「そうか、それは残念だ。君との契約もこれまでだ」

とはいえ、当然そんなもので納得できるわけがない。

「今回彼女がことごとく罠に引っかかるし、あっさりと捕まったせいでアリスにいろいろと手間をかけさせたから、いろいろとお金が必要なんだけど、それじゃあねえ？最低でもらはもらわないと、ね？」

「ぼつたくりすぎだ！！」

とはいえ、彼も彼で生活がある。

当然、そんなことは許容できるわけもない。

そもそも、情報屋になるような人間は堅気じゃないし、生まれ育っ

た環境も尋常じゃない。

セイルも、その例に漏れることなく、かなり金銭的には苦しい。だからこそ、譲れない物もある。

「やれやれ、じゃあ、本格的に君とはお別れになりそうだね」

けれど、こちらとて、譲れないものがある。

これから先、どうなるか分からない。

今までどおりに薬師としてやっていける保証だってない。

それを考えるとどうしても、先立つものが必要となる。

というわけで、僕とて譲れない。

「分かったよ、オプションをつける。というか、そもそも、それが狙いで、そんな事を言ってるんだらう？」

けれど、別にそれは金だけとは限らない。

というか、こんな回りくどい事をしたのは、むしろオプションのため。

「そんな事言わなくても、お前の頼みなら聞ける範囲で無償で聞いてやるのに」

「それだと、君に借りを作ったことになりそうだからな。とりあえず、そういうのは、後々のためには作っておきたくないんだ」

彼を信用していないわけじゃない。

けれど、彼にだって生活がある。

僕を裏切れば、それこそ、手段によれば、命を落とすことになる。

右頬を打たれたからと言って、左頬を出せるほど聖人をしているわけでもないし、大切な物を守るためだったら、いくらでも手を汚すそんなことぐらい彼だって分かっている。

けれど、僕に守るべきものがあるように、彼にだってある。

そのためには、どうしても僕を裏切らないといけなときがくる。

そのときのために、出来るだけ貸しは作っておきたくない。

それによつては、身動きが取れなくなってしまうかもしれない。

それを未然に防ぐためには、こうするしかない。

「まあ、それが正しいだろうよ、で、なんの情報が欲しい？」

そんなことぐらい彼も理解している。

苦笑して、先を促す。

お互い因果な商売をしているものだ。

「彼女は諦めたのか、それと、今僕を狙っている連中がどれくらいいるのか、それが知りたい」

見た感じ、あの女は意外としつこそうだった。

簡単に諦めてくれるとは到底思えない。

そして、もう一つ。

彼女以外に僕を狙っている人物がいるのか。

どう考えても、兵器としての僕を求めるのは分が悪すぎる。

しかし、彼女と言う前例がある以上樂觀視も出来まい。

「とりあえず、彼女なら諦めてはない。しつこく君の弱点を聞き出してたからな。で、他に狙っているのか、という質問だが、今のところ、君を必要としている国の噂は聞いてない。というよりも、今はどの国でも、自分の国を守る事で精一杯で、そんな事に時間を割いている暇もない」

妥当なところだろう。

とはいえ、まだ、他に参戦してこないだけかもしれないだろう。

さすがに、相手が増えると、捌ききれなくなるだろう。

それこそ、前回は運良く誰も殺さずに住んだが、今度はそれではすまないかもしれない。

かつての魔族狩りの時と同じように、その手が身体が返り血で真っ赤に染まるほど殺さないといけないかもしれない。

それが回避できただけでも収穫だろう。

それに、残っているのは、小物然としている彼女だけ。

これなら、いくらでも対処のしようがある。

「で、君は教えたのかい？」

「教えたさ。まあ、無意味だろうけどね。レイオンの弱点は一つだけ、彼女だけだろう？」

「その名は捨てた。今の僕は、ルイ・フェリルだ」

かつての名前。

父がつけてくれた名前。

けれど、それは、捨てた。

もう、そんな資格などないから。

優しかった父、暖かった母。

彼らがつけてくれた名前。

いつも微笑んで、僕の傍に居てくれた恋人。

彼女が呼んでくれた名前。

だけど、だからこそ、もう使えない。

もう、僕の手は誰の手も掴めないほど汚れてしまっているから。

ただ、粛々と罪を背負い、罰を受けないといけないから。

だから、幸せをその身体一杯に受け止めるために、それを願ってつけられたその名は、もう僕は使えない。

「はいはい、悪かったよ。というか、話の腰を折るなよ」

「……悪い」

とはいえ、こうしていちいち過剰反応するのも悪い癖だ。

「まあ、とりあえず、俺が知ってるルイの弱点はアリスだけ、そう言っておいた。だからと言って、彼女をどうしようとしても無駄だとも言っておいたがな」

そういった彼は薄く笑う。

「常にルイの傍にいる彼女をまさか拐かどわして人質にする事なんて、そもそも彼女の実力も、世界最強に師事している時点で並大抵の物じゃない。そんなのを相手にするなんて、現実的とは言えないからな」
彼には、アリスの正体は言っていない。

基本的に、人型をしている魔族を区別する事は出来ない。

もちろん、魔族との戦闘を数え切れない程してきた僕になら可能だが、そういう経験をしたことのない人間には分からない。

何一つとして変わらないのだ。

その恐ろしい程の力以外は。

けれど、それでも、彼女が僕に師事している事はもちろん、その力

の程も教えている。

実戦経験もなければ、僕に比べるとまだまだ足元にも及ばない彼女だけれども、防御だけに専念すれば、並大抵の人間にはまず負けない。

基本的に彼女に対する訓練も、それを念頭に置いている。

彼女の力は何かを奪うための力ではない。

何かを守るための力で合って欲しい。

だからこそ、守る事に特化した力を持った彼女なら、負ける事はない。

そして、その間に僕が駆けつければいい。

それだけでいい。

それだけで、彼女は守れる。

それゆえに、僕の弱点は彼女ではあるけど、隙はない。

守るために、全てを賭けている。

たった一人の家族のために。

「情報ありがとうよ。それだけ聞ければ十分だ。今回の配分はなしでいいさ」

「すまないな」

彼はそれを聞いて苦笑する。

確かに契約はしている。

けれど、それを行使する気は、それほどない。

そもそも、そこまでお金に困っていない。

薬師として働いてきた貯蓄がかなりある。

普段質素なものばかり食べているから、貧乏そうに見えるが、それは明日がどうなる身か分からないから、そのときのために貯蓄をしているから、そうなるだけで、貯蓄だけでも、かなりの額になる。

それだけ、質の高い薬を作っていたのだ。

「気にするな。今の僕と君は一蓮托生、お互い切っても切れない縁だからな」

けれど、それだけでは、やはり足りない。

やはり、彼の情報収集力が必要になる時がある。

だからこそ、僕らは一蓮托生。

業を背負うもの同士、今同じ場所に居る限り、一人だけが逃げる事は出来ない。

「それじゃあ、また今度。元気でな？」

片手を上げ、そういうと、部屋を後にする。

そして、途端に明るくなる視界。

ずっと薄暗いところに居たため、急に明るいところに出たせいで眼がくらむ。

けれど、だからと言って、そんな事で隙を見せる事もない。

「ケーキとお茶はおいしかったかい？」

テラスでのんびりお茶を楽しんでいる少女、アリスに問いかける。血生臭い話を彼女に聞かせるわけにはいかないが、遠いところに一人で居させるわけにもいかない。

だから、こうして、表のおまけの喫茶店で時間を潰してもらっている。

「はい。お話は終わっただんですか？」

「まあね。そろそろ帰ろうか？楽しい訓練が待ってるしね」

「うっ」

その言葉を聴いた瞬間、お茶を楽しんで居た時の幸せそうな笑みは消え、愕然とするアリス。

まあ、彼女にしてみれば、楽しい訓練と言うよりも、地獄の訓練と言ったほうが正しいんだろうが。

それでも、僕が守れないとき、そのための、彼女には力をつけてもらわないと困る。

せめて、耐久マラソンを無傷で帰ってこれるぐらいになってもらおう。そのとき、初めて、実戦形式で彼女を鍛えられる。

僕の攻撃を見る事が出来るぐらいにはなっているはずだから。

「さあさあ、レッツゴー」

「ルイさんってば、絶対Sだ。しかも、かなりのDSだ」

だから、どんなに嫌われようがどうしようが構わない。
彼女のそんな言葉も無視して、僕達は帰途へと着く。
僕達の帰る場所へと。

ルイさんの後を追って、喫茶店を出る。

ルイさんがここに来る時。

そのときは、いつも考え込むような表情をしている。
たいていは、何か問題が起きたときに来ている。

今日は、あの女の人。

かなり位の高い人だと言う事は分かった。

そして、その狙いがルイさんだと言うことも。

どうしてだろう。

どうしてルイさんは静かに暮らせないのだろう。

確かに、ルイさんは罪を背負っている。

たくさんの何の罪もない魔族を殺した。

それは、すごく重い罪。

だから、一生をかけて償わないといけない。

だけど、だからと言って、こんな安らぐ暇もないのはやりすぎじゃないだろうか。

たくさんの魔族を殺したように、たくさんの人達も救った。

偉業を成し遂げた人でもあるのだ。

ならば、少しぐらいの救いがあってもいいと思う。

こんな、辛い立場に追いやらなくてもいいじゃないか。
なのに、世界はそれを許してくれない。

ルイさんをどこまでも追い詰める。

ルイさんの事を苦しめる。

だからこそ、私を守る。

何の力もない私だけど、それでも守ってみせる。

ルイさんが少しでも幸せになれるように、少しでも安らげるように、

私が頑張る。

頑張って、幸せにしてみせる。

だからこそ、私は強くなりたい。

ルイさんまでとは言わないけれど、それでも、ルイさんの足手まといにならないぐらいには絶対に強くなる。

なってみせる。

「じゃあ、今日は50キロの重りを背負って耐久レースだよ、ファイト」

けれど、それも一瞬に萎えそうになる言葉を聴いた。

帰ると同時に、言われた言葉。

強くなるために、辛い努力をすることはやぶさかじゃない。

それぐらい頑張らないとルイさんに追いつけないのも分かっている。分かってるけど……

こんな地獄の特訓なんか、出来るわけがない。

絶対に無理。

鬼だ。

絶対に、この人鬼だ。

というか、鬼じゃすまない。

そんな生易しいものじゃない。

「ほら、頑張れ。重りが増えた分、道のりは短くしてるんだからさ」
そう言って、ルイさんはルートを示す。

それは、確かに短くなっている。

なっているけれど……

絶対に無理。

結局、かなりきつい距離であることには変わりない。

そもそも、未だに私は、前段回の耐久マラソンも終わってないのに。その状態で、これをさせるとはいかに。

そして、私と同じ重りを背負っているくせ、余裕綽々で笑いながら話しつつも、併走しているルイさんは、本当にどこまで超人なのだろうか。

私なんか、もう足ががくがくなのに、全然平気そうだ。

「ほらほら、制限時間以内に帰らないと、またペナルティだよ？」

「いやああああああ！！！！」

そして、いつものごとく、山中にて私の絶叫がこだまするのであった。

第五話 勇者と元女王候補と新居（前書き）

珍しく、早い更新です。

まあ、これは、第三話を書いている時点で考えていたんで、書きやすかったんですけどね。

なので、次回以降はやっぱり全く構成がないんで、時間はすっごく掛かるでしょうが。

とりあえず、いきなり出てきますが、あしからず。

第五話 勇者と元女王候補と新居

「とりあえず、王宮追い出されたから、責任取って面倒みてくれな
いかしら？」

いつものごとく、アリスに虐待とも取れる猛特訓をして帰ると、当然のように小屋の中のリビングを陣取っていた某国の殿下はそう言った。

それから、ちょうど一週間後。

ついに、僕達の新居は完成した。

僕とアリスと、そして……

クリストテレスが住む、新しい家。

クリストテレスとは、殿下の名前で、長いのでクリスと略してる。

で、その彼女の話では、無断で国の近衛兵を連れて城外に出て、勇者と会談したくせに、あっさりと負けて、ずこずこ引き下がったため、王宮での居場所がなくなり、挙句には王位継承権争奪レースからは外され、というか継承権を剥奪されたため、仕方なく王宮を後にしたらしい。

「まあ、私が住むには、ちょっとおんぼろだけど、この際仕方ない
か」

で、いろいろあったけれど、まあ、とりあえず、そろそろ家も手狭だから改築したいと思ったところで、彼女が王庫から金を盗んできたから、渡りに舟な感じだし、そもそも彼女自体は、割とおもしろそうだとも思ったから、しばらく様子見として受け入れたんだけど

……

「これだから、成り上がり人間と言う物は。生活する上での機能を最優先するのが一番です。だいたい、私達は目立ってはいけ
んですよ？どこかの誰かさんのせいで」

何故だか、すこぶるアリスと仲が悪い。

というよりも、アリスがクリスを眼の敵にしている。

何か言うたびに噛み付くのだ。

まあ、とはいえ、言っている事はいちいち正しいのだけれども。

アリスの言うとおり、クリスは王位継承権を剥奪はされたが、それでも一応王族であることには変わらない。

というわけで、他国に輿入れの話があり、実際それは進行していたけれど、突然の彼女の蒸発。

問題にならないわけではない。

というわけで、秘密裏に国をあげた大搜索戦が行われている。

おかげで、尚いつそう僕達は、身を隠さないといけない、というわけなのだ。

「それは、悪かったと思ってるわよ。だから、こうして、新居を建てるお金は私が全部出したんでしょ？」

「当然です、私もルイさんも今までどおりで良かったのに、狭い家は嫌だと我俣を言って改築しようと言い出したのは、貴女なんですから」

「あら、でも、さすがに、あの小さなベッドに三人は寝れないでしょう？」

「貴女は、適当に床で寝てればいいんです」

「随分ひどい扱いねえ？」

「迷惑も考えずに押しかけてきた貴方が悪いんです！！」

それが原因なのか、はたまたそれとはまた別なのかは知らないが、アリスの機嫌は日に日に悪くなっていつている。

それに、合わせて僕にべったりな度合いも大きくなっていつてるし。四六時中僕にくっついてはなれない。

基本的に、僕はこの小屋にいるため、彼女とはなれる事はまずないから、それはそれで四六時中くっついていとも言えるんだけど、それとはまた別で、距離が近くなったのだ。

まるで、肉食動物から我が子を守る母親のようにべったりなのだ。心配しなくても、自分の身ぐらい自分で守れるというのに。

「はいはい、喧嘩はそれぐらいにしようか。とりあえず、クリスの

居候は僕が了承したんだから、許してあげて？小間使いよろしく使
つてやればいいわけだし」

「うっ」

とはいえ、いつまでも喧嘩をさせて置くわけにもいかないので、仲
裁に入る。

まあ、不服そうなアリスはうなっているけれど。

本当に、彼女の事が嫌いなんだろう。

「ルイもたいがい性格悪いわよねえ」

「居候なんだから当然でしょう？そもそも、君がこんなところに来
たせいで余計な物までくつついてきたわけだし、自業自得。嫌なら
出てってもらって構わないから」

クリスからも文句が出てきたけど、それにもっこり笑って一刀両断。
喧嘩両成敗。

そういうことだ。

「じゃあ、そろそろ訓練に行こうか？楽しい楽しい特訓の時間だ」

「うっ」

アリスの顔が歪む。

「そういうわけで、それに僕は付いていくから、クリスは留守番し
つつ、掃除と洗濯と晩御飯の準備、よろしくね？」

「うっ」

今度はクリスの顔が歪む。

「二人とも頑張ろうね？」

そして、変わらず笑顔の僕でした。

アリスの訓練が終え、なんとも味付けが微妙なクリスの晩御飯を食
べた後、僕らは出来たての新居でくつろいでいた。

とりあえず、アリスは、今日一日の疲れを癒すために、バスタイム
中。

まあ、改築と言つか、ほとんど新築と変わらない新居は、クリスの
我侭と言つか贅沢とも取れる発言でお風呂はかなり大きくなってい

るため、リラックスするにはちょうど良く、僕自身長湯を勧めておいたから、しばらくは戻って来ない。

今、リビングには僕とクリスの二人きり。

「で、どうして、ここに来た？ 本当のことを教えてもらえないか？」
だからこそ、腹を割って話せる。

今まで、タイミングを計ってきたが、どうにもうまく合わなかった。
「私としては、貴方を利用してもらったのよ」

浮かぶ妖艶な表情。

彼女はその問いかけにあっさりと答えた。

「今の国の情勢は言ったわよね？ 適当な理由をでっち上げて戦争へ参加。それは、もう決定事項で、どうやっても覆せない。おかげで、半ば決まっていた私の王位継承もお流れ。どうやっても、再びの戦火は免れない」

そういう彼女の瞳は悲哀に満ちていた。

どこまでも深い悲しみに満ちていた。

「私も貴方と同意見なのよ。戦争なんてしたくないのよ。あんな事したって国は少しも豊かにならない。それどころから、どんどん衰えていく。そんな事をして、いったい何の意味があるの？ 国防ならいざ知らず、好き好んで戦争を仕掛けるなんて、考えられないわ」
確かに戦勝国になれば、多額の賠償金と領土を手にする。

それによってみかけだけなら、国は肥えていく。
けれど、中身は違う。

失った人的被害と、荒れ果てる大地。

戦場となった場所は、まず間違いなく荒れる。

それを再度元通りに戻すのは、壊すよりももっと手間が掛かる。
そんなに戦争なんて物は儲けるものじゃない。

それは、ただの欲の暴走と虚栄心を満たすため。

くだらない貴族達の思惑。

「でも、止められない。だから、最初は貴方を手に入れようと思った。貴方を引き抜く事で、私自身の力強化で、議会を牛耳る。そう

すれば、戦争を回避できる」

確かに僕と言う存在がいれば、多少の抑止力は得られるだろう。表を切って僕という兵器を持つ彼女に逆らう事は出来ない。

けれど、それは決して良策とは言えない。

むしろ、愚策。

「だけど、すぐに断念したわ。そんな事したら、内部に大きな抵抗勢力を作る事になり、やがては国の内部が混乱するでしょうね」
そうなれば、国は別れる。

彼女を主とする戦争回避派と議会の戦争推進派と別れて、大混乱になり、下手したら内紛になりかねない。

そうなってしまうえば、その隙をつけられ、侵略戦争を仕掛けられるかもしれない。

いや、まず間違いなくそうなるだろう。

それを、分かっている、僕を使って決着を図ろうなんて思わないだろう。

「だから、悩んだわ。悩んで悩んで悩みぬいて、そして出た答えがこれ。国を捨てる事。もう、私にはどうしようもない。この狂った国は止まらない。止められない。なら、日和見するしかないわ。戦争なんか関係ないところでね。そう考えたら、こうするしかなかったのよ。王位継承権を奪われる要因作りと逃げ場所の確保。ここが一番適当でしょう？」

確かに、逃げ場所としてはうってつけだろう。

目立つような場所でもないし、見つかったとしても、僕がいると知れば、下手に動けない。

簡単には手は出せない。

最適な場所だろう。

「君は王族としての責務を放棄して、逃げるのか？」

「勇者としての責務を放棄して逃げている貴方には言われたくないわ」

それは、単なる逃げ。

それを責めてみたが、あっさり切り返される。

そう、僕は勇者としての責務を放棄した。

元々、僕は勇者ではない。

ただの殺戮者。

でも、世界では違う。

世界では僕は救世主として、勇者として名を馳せている。

そして、救世主なら、勇者なら、この再び舞い戻った戦乱の世を沈めないといけない。

けれど、僕はそれを拒絶している。

ここで隠れている。

だから、僕の意見には聞く耳持たない、そういうことだろう。

「これは、今まで何度も言ってきたことだけど、僕は勇者じゃない。ただの人間だ」

「なら、私も人間ね」

彼女は見下すように、笑うように返す。

そう、僕も人間で、彼女も人間。

だけど、僕が込めた意味と彼女の込めた意味は違う。

全く違う。

「いや、違う。君は、ただの人間じゃない。国に生かされた人間なんだ。僕達ただの人間、平民から搾取して生きてきた人間なんだ。僕達とは違う」

確かに生き物としては同じカテゴリーに入るだろう。

僕も彼女も人と言う種族。

だけど、存在の意味合いは違う。

僕達は、自然に生かされつつも、自分自身の力で生きてきた。

自分の手で生を手にしてきた。

けれど、彼女達王族は違う。

他者から生かされてきた。

自分の手を汚すことなく他人に手を汚させ生きてきた。

特に彼女なんかはそうだろう。

王位継承者であつた彼女は、温室でぬくぬくと育てられ生きてきた。だから、僕達とは違う。

存在の意味合いが違う。

「だから、僕と同じ事は許されない。生かされてきた君は、その手を汚さずに生きてきた君には、僕と同じ道を進む事は許されない。王族としての責務から逃げ出す事は許されない」

僕はただの村人だった。

そして、殺戮者としての業を背負いながらも、その存在は変わらない。

僕はどこまでいってもただの村人。

その存在が変わる事はない。

だから、どんなに周りが僕の事を勇者と言っても変わらない。

僕自身が、その存在を変えていないのだから、何があっても変わらないのだ。

ただ、仰々しい、『世界最強』と『勇者』なんて言う通り名が付く、村人に過ぎない。

だからこそ、僕には村人としての責務しかこの背にはかかってこない。

職業勇者でもなんでもない僕には。

だけど、彼女は違う。

彼女はどこまで行ってもその存在は王族。

その血に脈々と流れる血は変わらないし、それまで生かされてきた事実も変わらない。

故に、彼女はその過去から逃れられない。

彼女がそこから逃れられるのは、その責務を果たし終えてから。

彼女自身が、王族として果たさなければならぬ、責務を果たしたとき、初めて彼女は自由になるのだ。

「君が僕と同じ平民だったら、その言い分も通るだろうけどね」
得るものが大きいからこそ、背負うものも大きい。

ただの平民だった僕には、背負うものなんて多くない。

勇者と言われようが、救世主と言われようが関係ない。

僕は地位は平民なんだ。

そして、彼女は王位継承権を失おうと、王宮から逃げてきたからと言っても変わらない。

僕は平民で彼女は王族。

それは変わる事はないし、故に同じ理屈が通る事なんてない。

「なら、どうしろと言う？ 今更戻れというのか？ 戻って、他国に輿入れしろ、と？ 政治の道具になれと言うのか？」

そう言う彼女が僕を見る眼は厳しい。

そりゃそうだろう。

王族として、ただ政治の道具として生きると言われているのだ、腹を立てないはずがない。

「それが嫌ならあがけがいい。僕は足掻いた。家族が恋人が殺されて、全てを失って、そんな現実が嫌だから、足掻いて復讐した。もう二度とこの手から何もこぼれないように、奪われないように。そのためだけに力を望み、手に入れ、そしてこの手を汚した。ここは汚す前からいられるような場所じゃない」

ここは、この場所は疲れ果てた人間のためのもの。

足掻き、苦しみ、絶望し、身も心もずたずたになりながらも、それでも、何かを追い求めるものがいられる場所。

ただ、そこにある現実が嫌だからと言って逃げ出した人間のためになんかある場所じゃない。

「私だって足掻いた！ 戦争を止めるために、政治の道具にならないために足掻いて戦ったさ。だけど、ダメだったんだ。誰も、私が伸ばした手を取らなかった。取ろうとしなかったんだ。私だけの力では変えられなかった。味方はどこにもいなかった」

どんなに望んでも手に入れないものはある。

どんなに願っても叶わないものもある。

彼女の願いは、届かなかった。

それだけの事。

だから、彼女は逃げ出した。

ただ国の道具として生きる事を拒むために。

「なら、どうして、ここに来た。ここに逃げ込んで何をするつもりでいるんだい？」

それを、僕は否定する事はしない。

確かに、何かを変えるために戦ったのなら、それは評価できること。否定すべき事ではない。

「……………」

けれど、彼女の答えはない。

彼女は、ただ黙り込む。

分からないのだろう。

現実にかけてから、彼女の時は止まっている。

ただ、逃げ場所を確保する事のみ考えていた。

だからこそ、ここに来てから後の事を考えられなかった。

「とりあえず、しばらくの間はここにいたいよ。君の答えが出るまではね。だからと言って、いつまでも考えようとしなかったら、追い出すけど。いつまでも、逃げてるわけにはいかないんだから」

なら、猶予を与えよう。

闘い傷ついた人間なら、ここにいても構わない。

そして、出来れば、巣立って欲しい。

答えを見つけ、そして、歩んで欲しい。

僕は答えを出した。

僕の生まれた村はもうなくなった。

だから、故郷なんてないけど、今住んでいるここは、麓にある街は、もう僕にとっては故郷みたいな物。

僕の居場所。

そして、たった一人の家族。

こんな僕でも、手を差し伸べてくれたたった一人の少女、アリス。その二つを守る。

それが、僕の答え。

殺戮を繰り返した罪を償うために、僕は奪ってきた命以上にたくさん
の命を救いたい。

自分が大切だと思う人たちを守りたいと思う。

どんなに僕が無力でも、それぐらいは出来ると思うから。

そして、僕が答えを出せたように、彼女にも出せると思うから。

どんなに時間が掛かっても、人は答えを出せる。

苦しんで、足掻いて、喘いで、絶望しても、それでも、たどり着け
ると思うから。

だから、僕は彼女を信じる。

信じて、居場所を提供する。

彼女が考える事に集中できるように。

彼女を邪魔する人間が来ないように。

彼女が救われるように。

『なら、どうして、ここに来た。ここに逃げ込んで何をするつもり
でいるんだい？』

ルイ・フェリルが私にした問いかけ。

それに、答えられなかった。

ただ、逃げることしか考えていなかった。

もう、疲れたから。

全てに疲れたから。

どんなに願っても、望んでも、そして、戦っても、自分が願ったも
の望んだ物は何一つとして手にする事は出来なかった。

さらさらと水が手のひらからこぼれていくかのように、逃げていっ
た。

だから、悟った。

どんなに望んでも、願っても、手にする事は出来ない。

私が王族である限り、周囲に世界に翻弄され、何一つとして決めら
れず、彼らが敷いた道を歩かされる。

だから逃げ出したのだ。

そんな世界に居たくなかったから。

自由が欲しかったから。

自分で選びたかったから。

けれど、自由を手にして、自分で選べる状況になって、そのとき、自分は何をしたいのか、そんな事は全く考えていなかった。考えようともしなかった。

それでは、確かに、彼を否定できない。

彼は、確かに選択した。

選択し、そして、歩んでいる。

今でも、魔族、魔物からの襲撃は多少なりあるし、未だに治まらない治安悪化による、盗賊の被害だって、出ている。

それが、この街にはない。

起こる前に潰されている。

そして、それは彼が止めているのだろう。

彼は、歩んでいる。

アリスと、そして、この街を守っている。

ひどく我侭で自分勝手だけど、それでも、自分が出した答えに真正面から向き合い、それに応えている。

きっと、それを私は見習わないといけないのだろう。

一度、自分で選択したいと、するんだと決めたんだ。

なら、彼が言うまでもない、答えを見つけないければならない。

王族として生きるのではなく、クリスと言う一人の人間として生きるための答えを。

第五話 勇者と元女王候補と新居（後書き）

まあ、クリスがけちゅんけちゅん言われましたが……
なら、アリスはどうなんだと言われそうですねえ。
とりあえず、そこらへんのフォローしてくれるでしょう。
てか、するはず……と思いたいww

第六話 他称勇者と暗い事後処理（前書き）

ホントにえらく時間が掛かってしまいましたね。
しかも、また恐ろしく暗い。
いや、まあ、すんません。

第六話 他称勇者と暗い事後処理

「カリスマ様、どうか状況を考えてください」

「考えているさ、考えているからこそ、領けない、そういうことだ」
目の前にいる男に笑いながら答える。

そう、僕は状況をしっかりと把握している。

しているからこそ、領けないのだ。

ここは、僕が住んでいる小屋の麓にある街からまた少しだけ都の方に進んだところにあるやや開けた街。

僕は、情報屋に頼んで、この場所に目の前に居る彼を呼んだ。

まあ、彼が僕の小屋にまで足を運ぼうとしているから、ここでの会談にした、というのが正しいところなんだが。

「何故、状況がお分かりになっていて殿下をお隠しになるのですか？今、我が国に、殿下は必要なのです」

「まあ、そうだろうな、供物ぐらいの価値しかないだろうが、それでも必要だろうな貴国においては」

「カリスマ様、どうか曲解しないでください。確かに、貴方方から見れば、人身御供にしか見えないのかもしれませんが、殿下も王家の人間として生きてきたのです。いえ、生かされてきたのです。だからこそ、王家の責務から逃げる事は許されないのです」

そんなの知っている。

僕が彼女に言った事だ。

逃げるな、と。

向き合え、と。

だけど、それとこれとは別の話。

僕は自分勝手だから。

救いたいと思ったものは救う。

例え、それが間違ったことだとしても。

「話がそれだけなら帰ってもらおうか？それでも、僕は忙しいんで

ね。僕の薬を待っている人がいる」

「……もし、貴方が領いていただければ、貴方の作った薬を売買禁止にさせて戴きます」

「売買禁止、ね？薬の質にはなんら問題もないのに、か？」

「売買法に問題があります。貴方があまりにも高品質で安価の薬を供給するため、市場が崩壊しかけています。このままでは、他の薬師が職を失いかねません」

「まあ、道理としては分かるが、それで助かる命が助からなくなるのではないか？安いから買える人間がいくらでもいる。特に富裕階級以外の人達には、僕以外の薬は買えない」

確かに、道理は通る。

だが、そのせいで、助かる命も助からない。

そもそも、薬師の作る薬は高すぎる。

もちろん、全ての薬が高いわけではない、比較的軽度の病用の薬は安価ではあるが、重病の薬は恐ろしく高い。

使われる材料が希少品であるのもそうだが、何より命よりも高い物はない、なんていう足元を見た料金設定のせいだからである。

おかげで、富裕層以外は買えない。

元々、富裕層向けに作られたものである上に、それ以下の人間には生きる価値などないと考えているからである。

商売相手にならない人間は切り捨てる、薬師にはそういう考えがある。

だから、高位の薬師の全てが豪邸に住んでいるものだ。

金の亡者の証として。

「その方々には申し訳ないが諦めてもらいます。殿下を取り戻すためなら犠牲も仕方ありません」

「彼女を取り返すために何の罪もない彼らを犠牲にし、取り返したら彼女を犠牲にし戦争をしかけ、そして、また彼らを犠牲にする。他人の命を賭して賭けをする。なんとも浅ましいものだな」

「それこそ曲解です。我ら貴族が居なければ彼らは生きられない。

そして、我らは彼らの住み良い世界を作るために戦うんです。だからこそ、彼らもまた命を賭してもらっているわけです」

「欺瞞だな。彼らは貴族なんていなくても生きていける。必要なのは最低限の監視者だ」

彼らは生きていける。

むしろ、逆に貴族が彼らによつて生かされている。

そして、彼らが貴族に求めている物は監視者としての在り方。

悪から守ってもらうための監視者であり守護者。

彼らは貴族にそれを求め、生かしていた。

けれど、その関係が変質した。

変質し、今の関係となつていただけなのである。

「どうやら、貴方とはどうやっても話は平行線のようなですね。不本意ですが、薬師としての貴方には死んでもらいます」

「それなら、僕は構わない。代わりに国が滅びるだけだ」

「どういう意味ですか？」

「簡単な話だ。僕が守ってきた、守ろうとしている命を奪おうとするんだ、それに抗わないわけがない」

正義を振りかざすつもりはやはり毛頭ない。

僕はどこまでも弱く愚かな人間なのだ。

だから、僕の出来る事を、僕が守ろうとしているものを奪うのなら、抗うだけだ。

僕の仕事を奪うのなら、抗うだけなのだ。

その結果として、たくさんの人を身を危険に晒そうと、それこそが悪だったとしても、それでも、抗う。

「脅すおつもりですか？」

「脅しも何もない。ただ、起こるであろう未来を話しているだけです」

「それが脅しだと言うのです。そういえば、私達は抗えないと思っ
ているのでしょうか？」

「まさか、最終手段が残っている。この僕を殺すこと。まさか、そ

れが出来ないなどと思っているわけでもないでしょう?」

世界は僕を望むと同時に疎んでいる。

味方となれば心強く、敵となれば厄介極まりない。

それが僕。

だからこそ、世界は強く望みながらも疎む。

そうして、疎んでいるからこそ、考えるはずである。

仲間でないとき、敵となったとき、そのときどうやって殺すのか、それを。

「その証の武装だろう?この場で、交渉が決裂した場合の最終手段として、な?」

腰にかけられている剣と、兜を脱いでいるとはいえ、全身にくまなく装着されている防具、戦闘を考慮しているものと考えるのが正しい。

例え、盗賊や獣などの襲撃の事を考えていたとしても、あまりにも仰々しい過ぎる。

装備している剣も防具も全て超一級のエンチャントが施されている。たかだかその程度の相手に、そんなものを装備するわけがない。

それこそ、おそろしく強い、今はなりを潜めている魔族かそれと同等の相手との戦闘を考えていなければ装備しない。

「ばれてしまつていては仕方ありません。確かに、私と貴方では地力は違い過ぎる。ともに戦えば百回やつても百回とも負けるでしょう。ですが、貴方は人間。どんなに鍛えても人間に過ぎない。

なら、そこに隙があり、そこを突けば自ずと戦い方は見えてくる」

「まあ、間違いではないな」

なかなか賢い。

確かに、普通に戦えば、僕に勝てる人間はまずいない。

正面から魔王とぶつかって闘い、勝利を手にしたのだ、それを今までしてきて全く歯が立たなかった他の人間では勝てない。

それはどうやつても変わらない、変えられない事実。

だが、それは勝てない事の証ではない。

何にだって弱点はある。

そして、僕には、僕が人間であると言う事。

どんなに身体を鍛えて、魔法を鍛えたとしても、人間である事は変わらない。

寿命が来れば死ぬし、腕や足を失ったら二度と生えて来る事はないし、首を跳ね飛ばされたり、心臓を一突きされたら死ぬ。

それは、他の人間とは何一つ変わらない。

「だからこそその勝機、掴ませていただきます。でやああああ!!」
彼は躊躇なく踏み込み、跳躍する。

それは、決して特別早いものではない。

僕や魔王レベルには及ぶわけもなく、軽々と屠ってきた魔族レベルでもない。

騎士としては早い部類に入るだろうが、それは決して人並み外れた物ではない。

「それをバカ正直に受けると思っかい？」

けれど、僕はバックステップで後方に下がる事でそれを回避する。

彼が僕の弱点を知り、そしてその弱点を突こうとしている事は分かっている。

しかし、それはあくまでも、結果の事であって手段ではない。

どのような手段なのかは分からない。

何も分らない状態で、素直に相手は出来ない。

『我が手に蘇れ悪しき魔の剣よ・イビルソード』

そして、それと同時に、僕を殺そうとする人間は潰す。

聖人君子でもなければ、なんでもない、愚かな弱い人間。

自分の命を捨てる事なんて出来ない。

たくさんの命を奪ったからと言って、捨てる気はない。

守るために使い、その果てに死を願う。

呼び出した闇の剣は空中をさまよう。

術者の命令を待つために。

「何を狙うか知らないが、僕は手を抜かない。切り刻め」

相手の手の内が分からないなら、遠距離攻撃しかない。

けれど、通常の遠距離魔法ではどんなに威力を絞っても、周囲に対する被害が出てしまう。

そのための闇の剣。

操作系の魔術ならば、距離を取りつつ、被害を抑えての攻撃が出来る。

闇の剣が彼に襲いかかる。

「甘いですよ」

けれど、それは彼に届かない。

纏った防具に飲み込まれていく。

「光属性のエンチャントか」

「ええ、そうです。貴方が得意とするのは闇の魔法。その他の系統も使えますが、細かい威力配分は出来ない。よって、このような場面では、貴方は闇の魔法しか使えませんし、威力を抑えた魔法であれば、光属性のエンチャントをしておけば、防ぐ事は難しくありません」

よく調べたものだ。

確かに、僕はあらゆる系統の魔法を使うことが出来るが、大雑把なものならまだしも、細かい調整は闇属性しか出来ない。

復讐に取り付かれ、暗き闇に堕ちた僕は、力の全てが闇色に染まっ
てしまっていた。

だからこそこの奇策とも言える策が功を為す。

これで、確かに僕は魔法と言うものを抑えられた。

「そして、貴方はまだ私がどんな手段を使って貴方を倒すかを知らない。だから、接近戦は出来ない。けれど、私は出来る」

そして、それと同時に、既に接近戦という手段も奪われている。

「チェックメイトです」

そして、彼はまた、跳躍する。

接近戦も魔法による遠距離攻撃も封じられた僕には攻撃手段はない。
追い詰められた。

ならば、破れかぶれで接近戦をやってみるのも一興だろう。

もしかするとただの虚勢の可能性で、実際は何も考えていない可能性だってある。

ならば、その可能性に賭けてみるのもいいだろう。

多少危ない賭けであるかもしれないが、それでも試して見る価値はあるだろう。

もし、本当に僕が追い詰められているのならば。

「チェックメイトにはまだ早い。後一手必要だよ」

世界が途端に歪む。

確かに、彼に対する魔法は封じられた。

けれど、それが全ての魔法が封じられたという事になるのではない。

僕はいくつかの魔法を持っているが、全ての魔法が攻撃魔法と言うわけではない。

回復魔法であったり、補助魔法だつてあるし、移動魔法だつてある。攻撃魔法を封じたからと言って、全ての魔法を封じたと思うのは短絡過ぎる。

『我が世界に誘え・アナザーワールド』

歪んだ世界は一つの穴に飲み込まれて行く。

僕と彼と共に。

僕の世界に、僕が自由に戦うための世界に。

「これで、僕がチェックメイト、だね？」

この世界では、僕と彼しかない。

僕が『アナザーワールド』と呼んでいるこの世界は、普段僕達が住んでいる世界、空間の歪みから出来ている世界であり、本来は閉じ切っているために入る事は出来ないが、極稀に、ある法則にしたがつて、条件が満たされた場合、その閉じた空間が開き、傍にいる人間をその世界に飲み込む。

そして、そこに飲み込まれた人間は、まず帰ってこれない。

自分自身で、その空間を開くことが出来れば帰る事は出来るが、普

通の人間にはそんな事はまず不可能である。

だから、その穴が出来るのを待たなければいけないが、穴が開く周期は長ければ何年もかかる場合があり、何ない空間でそんなに長い間生きていけるわけもなければ、その開いた穴が運良く目の前に出てくるとは限らない。

この空間は恐ろしく広く、おそらく僕達が住んでいる世界よりもずっとずっと広い。

そんな広い空間で目の前に穴が出来るのなんて、まずありえない。

「恐ろしいかただ。まさか、こんな魔法まで使えるとは。幻術ですか？」

「いや、簡単に言えば移動魔法ですね。これの本来の使い方は、この空間を仲立ちにして、遠距離を移動するために作った魔法ですから」

「そうですか。ですが、確かにこれで、私の優位性はなくなりました。ここですら、貴方は自由に魔法が使える。そうなれば、私には勝ち目はない。お手上げです」

「諦めが早くて助かる。ここで抗われれば、僕は殺さなくてはいけなくなる。だけど、出来るならそんな事はしたくないからね」

口でそうは言うが、構えは解かない。

彼がまだ何かを狙っている可能性だってある。

だけど、ここで全てが終わる事を願う。

戦うと決めた時は揺ぎ無いが、それでもやはり出来るだけ殺したくない。

助かる命をわざわざ好き好んで奪いたくない。

「君を王都へと送るよ」

「ああ、良かった。このままここに残されるのかと思いましたよ」

「そんな事はしないさ。それじゃあ、もう二度と会わない事を願うよ」

彼の足元に道を開く。

王都へと繋がる道。

そして、僕の足元には、先ほど居た場所に繋がる道。

それぞれの道がそれぞれの場所へと導く。

導き、そして、僕は……

「御命戴きますー!!」

「甘いよ」

影ですつと息を潜めていた騎士の首を飛ばす。

恐らく僕の間をうかがっていたのだろう。

そして、『アナザーワールド』から戻ってきた僕は、確かに隙だらけだった。

だから、彼も狙ったのだろう。

だけど、そんなことぐらい予測していた。

気配を読む事なんて、日常茶飯事の事なんだから。

首を引き飛ばされた騎士は、声にもならない悲鳴を上げ、首は転げ落ち、身体は崩れ落ちる。

吹き出て止まらない血は、床を赤く濡らし、そして侵食して行く。

「呪い、ね。自分の血を呪いの媒体にして、それに触れたらその呪いに侵食される。捨て身の攻撃か。確かにこれなら僕には接近戦は出来ないし、呪いを受ければ、僕はあっさり死ぬだろう。その血を浴びれば」

そう、確かに浴びれば、僕はその呪いを受け、あっさり死んでしまっただろう。

だけど、僕の服には血の染みは一つとしてない。

血に毒をもつ魔族が居た以来、僕は返り血は何があってもあびないようにしていたし、何より、返り血を浴びて喜ぶ趣味なんてない。

そもそも、斬った瞬間に血が噴出す事はなく、絶対にワンプンポ遅れて出血する。

そのワンプンポの間に離れれば、返り血を浴びる事はまずない。

例え、離れられなかったとしても、風の結界で吹き飛ばせばすむことだ、

そんなものに触れるわけではない。

「本当に、また、会わない事を願うよ」

死体と血だまりと呪いに侵食された床を消滅させると、僕はその場を去った。

「ルイ・フェリルの妻のクリスです、これからどうぞよろしく願います」

「へー、べっぴんな奥さんだな」

「ありがとうございます」

帰ってくると、いつの間にか僕の妻となっているクリスと喫茶店のウェ이터が仲良く話していた。

帰って来たら、アリスとクリスがどこにもいないから、どうしたものかと思ったら、買出しついでに麓でお茶をしていたらしい。なんとも平和な話だ。

「はいはい、勝手に捏造しないこと、小間使い如きが戯言言わないの。そして、お前も真に受けない」

平和すぎて、笑えて来る。

やっぱり、僕はこっちの方がいい。

あんな血生臭くて、心が碎けてしまうような事はしたくない。静かに暮したい。

こんなくだらないボケにツツコミを入れているような生活が。

第六話 他称勇者と暗い事後処理（後書き）

とりあえず、ここから先は、多少は明るく鳴ってくれると思います。
てか、思いたいです。

第七話 勇者の楽は常人には地獄？（前書き）

長らくおまたしました。

続きです。

ですが、ちょっと短くなりました。

第七話 勇者の楽は常人には地獄？

まだ、夜も明けきらない、そんな朝。

その時間に、僕の日が始まる。

簡単な屈伸運動で身体の筋を伸ばすと、準備運動を始める。

背中には100キロの重り。

それを背負い、山道を走る。

アリスが走るコースとは違う。

彼女が走っているものよりもずっと険しく長い。

トラップも命を奪うような物ばかりで、一歩間違えれば死ぬ。

だけど、それが緊張感を生み出してくれて、訓練としてはちょうどいい。

「うおっと、危ない危ない」

突如反応したトラップを回避し、解除する。

いくら、自分がしかけたものとは言え、どこでどう反応するかなんては知らない。

完全にランダムに反応するようにしているから、どこでどんな条件で発動するのかわかって、僕にもわからない。

そうでなければ、訓練になりはしないのだが。

「はっ、よっ、よいしょっ」

次々と発動するトラップを回避し、解除し続ける。

さすがに、後半になってくると、全速力と重りのおかげで、かなり苦しい。

それでも、スピードが緩まない辺り、自分の化け物加減が凄まじい。今、魔王と戦えば、楽に倒せるだろう。

まあ、反則技を使っている辺り、正々堂々とは言えないだろうけど、それでも以前みたいな満身創痍になることはまずないだろう。

「ダークフレイム」

そして、最後の大型トラップ。

僕が到着すると同時に出てくる幻の敵。

それを、闇の炎で燃やし尽くす。

それでおしまい。

息は多少切れているが、まだまだ闇の残る空を見る辺り、そんなに時間は経っていない。

どうやら、自己記録を更新することができたようだ。

今更、力はいらない。

今の僕に一对一で戦って勝てる相手はいないだろう。

だけど、それでも力が不要なわけでもない。

むしろ、やりたい放題やっているんだから、いつでも自分と傍に居る人たちを守るだけの力が必要になる。

そして、今はまだ足りない。

今の僕じゃ、守りきれない自信はない。

だから、力が必要なんだ。

僕は、呼吸を整えると、来た道に戻る。

一応、トラップは残っているが、大型のはない。

油断さえしなければ、なんてことないトラップ。

さつさと帰ったら、汗を流して、二度寝しよう。

呑気で穏やかな日常のために。

「ふあ、眠い」

目を覚ますと、窓の外を見る。

木々の隙間から見える太陽はちょうど真上。

どうやら、お昼を回ったらしい。

随分と眠ってしまったものだ。

「あー、間接が痛いな。もしかして、年か？」

間接を動かすたびに「ごきりごきり」と音がする。

潤いというか、油が足りていないのだろう。

ぜんまい仕掛けも油が足りて居ないときは、こんな感じの音を出していたし。

「油でも注入してみるか？」

「やめておきなさい。そんな事したって、治らないから」
ため息まじりにそういう声が聞こえる。

「分かってるよ。冗談なんだから、いちいち気にしないでよ」

どうやら、いつまで経っても起きないから、クリスが起こしにきてくれたみたいだ。

ただ、すつごく面倒くさそうな顔をしているが。

「まあ、いいけど。起きたなら、さっさとリビングに来なさい。お昼の準備ができてるわよ？」

「うい、了解」

更に面倒臭そうな声で続けて言うと、さっさと出て行く彼女の背中にそう返すと、着替える。

さすがに、昼を過ぎて、パジャマはどうかと思うし。

素早く着替え終わると、リビングに入る。

そこには、暖かくて美味しそうなパンとスープと卵料理、サラダボールが置いてある。

誰が作ったのかなんて言う物は明白だ。

「今日は、アリスか、良かった」

思わず安堵の声が出たが、睨まれた。

これも、誰かなんて言う物は明白。

「睨む暇があったら、少しは上達してください。あんな劇物、餓死寸前の前線の兵士だって食べませんよ？」

辛らつな言葉を投げ返す。

しかも、事実だけに否定できない。

多少、家事はできるようになったけれど、料理はできない。

もう、才能なんて物は皆無なんだろうと理解できるほど、へたくそ。自分の感性やら勘にしたがって作るから、食べられるものにならない。

一度、出来上がった奇妙なものを恐る恐る一かじりしてみたが、瞬間的に死を覚悟した。

それぐらいの劇物ぶりだった。

「覚えて置きなさい。この屈辱忘れませんわ」

「なら、今すぐどこかに行って花嫁修業でもして来い」

そうすれば、多少ましになるだろう。

ついでに、適当に男を捕まえてくれば、面倒事も減って万々歳だ。

まあ、その相手は確実に死ぬだろうけど。

彼女の劇物のせいかな、はたまた、王家関係の人間の手にかかるかの
どっちで。

どこまでも他人事なので、僕は知ったこっちゃないけど。

「ルイのために？ルイと結婚するた……」

「分けのわからないことを言わないでください。今度そんな事言ったら燃やします」

アリスが手から炎を生み出す。

それを見たクリスはにやりと嬉しそうに笑っている。

どうやら、またからかっているようだ。

まあ、これはこれでアリスの会話練習になるから、構わないんだけど、僕をネタにするのはやめて欲しい。

対応に困るし。

「あら、大丈夫よ。ちゃんと結婚しても、貴方も連れてってあげるわよ？馬番の仕事ぐらいならさせてあげるわ」

「燃やす!!」

（ぎゃああああ）

思わず心内で叫ぶ。

完全にアリスの目は本気だ。

本気で燃やすつもりだ。

即座に、転送の魔法を使うと、二人を外に出す。

とりあえず、家を燃やされたらたまったものじゃない。

こんなことのせいで燃えたら、せっかくの新居がもつたいたい。

特に、今のベッドはふかふかでお気に入りなんだから、何が何でも死守しなくちゃいけない。

『デスフレイム』

「外れ」

「むきいいい!!!」

そろりそろりと窓の外を見る。

すると、そこには、修羅の如く魔法をぶっ放しているアリスと、それをすりすりりと避けているクリスの姿がある。

本気で、殺す気で、しかも落ち着いて戦えばアリスの圧勝だろうけど、怒りで冷静さどころか我を忘れてしまっている辺りのせいで、当たらないのだろう。

まあ、さすがに当てられても困るが。

後が残らない程度にやってくれるのが一番だ。

よし、今度それを教えておこう。

さすがに、元一国のお姫様を傷物にするわけにはいかないし。

そろそろ手加減と言う物を覚えるころだろう。

そうじゃないと、ちゃんと戦えないし。

戦わせる気はないけれど、望みどおりの展開になってくれる現実ではないし。

そのときのために対処はしておくべきだろう。

僕はため息を吐くと、特訓プランを考え始める。

そして、浮かんできたのは二つ。

一つは、かなり厳しいけれど、早く見に付ける事が出来る。

もう一つは、時間はかかるが、それでも安全にできる。

この前の事を考えると一刻も早く、彼女自身戦えるだけの能力を身につけさせなければ行けない以上、前者の方法の方がいいだろう。

けれど、その方法はどうしても手口がえぐい。

僕自身もやったことのある方法だけれども、身体に覚えこませる手段だけに、身体にかかる負担はとてつもなくでかい。

それを果たして彼女にもやらせていいものか。

とはいえ、既に答えは出ている。

「はいはい、そんな危なっかしい喧嘩はそこまでだよ」

ずっと二人の襟元を掴むと、持ち上げる。

「ルイ、これは女の戦いなの、邪魔しないで！」

「はいはい、分かったから、一旦落ち着いて。とりあえず、今みたいに無茶苦茶なやりかたでやれるわけがないだろう？ここは冷静になつていたぶるようにやりなさい」

「恐ろしいことを平然と言わないでちょうだい」

「だったら、いちいちアリスをからかわないでください」

クリスが文句を言うが、自業自得、彼女がからかうから、こういうことになるのだ。

「僕個人としても、ぜひとも彼女の事をいたぶってもらいたいけど、暇じゃないから、ここまでね。アリスには、僕からのプレゼン
ト」

「ふえ！？あ、えっと、今日は、ちょっと休みたいなあ、とか思ったりみたりして？」

「で？」

「頑張ります」

彼女は、泣きそうな顔をして、そういう。

足掻くだけ無駄なのに、やっぱり嫌なんだろう。

確かに、僕の特訓方法はえげつないから、嫌がつて当然なんだけど、もう少しやる気に鳴って欲しい。

それに、別に、今回はえげつないほうでやるわけだし。

さすがに、あれを彼女にさせるわけにはいかない。

廃人になれかねないし。

「さあ、レッツゴー」

僕は、アリスを連れて、山の奥に向かった。

胸一杯に夜の空気を吸い込む。

家の中では、恐らくルイがアリスにマッサージをしてやっているところだろう。

アリス曰く、鬼のような特訓を受けたらしい。

実際に、受けている姿を見た事がないから、なんとも言えないが、ぼろぼろでまともに動けない様子を見ると、そうとう辛い特訓だったのだろう。

とはいえ、ルイは、まだまだ楽なほうだとは言っていたのだが、それはいつたいどんなレベルなのだろうか。想像するだけでも恐ろしい。

まさしく人外。

まあ、それぐらいじゃないと魔王には勝てなかったんだろうけれど、もう一度胸一杯に空気を吸い込む。ここに来てからは、よくしている。

城ではそんなことができなかったし、やっても無駄だった。

一人になれる場所なんてなかったから、そんなことをやってみたところで爽快感はない。

一人で静かにやるからこそ意味があるのであって、そばに誰かが居られてのでは、意味はない。

本当に、思い出すだけでも、王宮での生活は良かったものではない。確かに、生活に困る事はなかったが、自由はなかった。

下々の人間は、王族を羨ましがすが、私には理解できない。確かに、死ぬ事はない。

餓死したりする事はないだろう。

けれど、その代わりに、生き物ではなくなる。

自由意志が何一つとして許されないのだ、それは生き物ではない。ただの人形だ。

その人形として生きていかなければなくなる。

それが、生きていると言えるのだろうか。

私には、どうしても言えるとは思えなかった。

だから、どうしてもそんなにいいものだとは思えなかった。

むしろ、こうして呑気にしている方が幸せだ。

文句を言われたり、すっごく辛らつな事を言われたりもするけど、自分で考える事は許されているし、対等の立場で物も言える。

王族の位のおまけについているような私の人格ではなく、ただ私の人格だけを見て、言いあえる。

それがたまらなく楽しい。

やはり、ここに来たのは正解だったようだ。

ただ、王族として、国の道具として生かされているよりもずっとずつといい。

今、私は満たされている。

目を閉じてもう一度思いつきり空気を吸うと、私は家の中に戻った。

第七話 勇者の楽は常人には地獄？（後書き）

次回の更新予定は、すみません、未定です。

第八話 他称勇者の苦悩と魔王の憎悪（前書き）

やっぱり、今回も短いです。
すみません。

第八話 他称勇者の苦悩と魔王の憎悪

漆黒の闇。

そこに、今僕はいる。

深い深い闇の中に。

目を瞑るといつもその情景が目映る。

深い深い悲しみの色が。

それは、この生活が始まってから、少しずつ大きくなって着ている。一人だったころは違った。

黒く染まることは確かにいやだったけど、復讐をなすためにはそれが必要だったから、割り切れたし、むしろ楽だった。たくさん魔族を殺した。

時には同士のはずの人間も殺した。

そうしないと生き残れないから。

僕は殺し続けた。

だから、黒く染まっていたほうが楽だったし、それがゆえに、目を瞑った先が真っ暗でもかまわなかった。

それこそが、僕にはお似合いだったから。

家族と恋人を失って独りになった僕にはそれがぴたりだったから。復讐鬼として、修羅となった以上、もう僕には未来がないことなんてわかっていたから。

全てを終わらせたら、自害する気だったから。

だから、それでよかった。

でも、今は違う。

今も、死ぬことは怖くない。

これだけ手を汚しておいて、自分だけのうのうと生き残って、平穩無事に暮らしていこうという気持ちなんてない。

だけど、それでも時々辛くなる。

未来のあるアリスを見ると。

彼女には未来がある。

魔王の娘としての責務もあるけれど、それでも未来がある。彼女が選ぶことの出来る億戦の選択肢の向こうにはたくさんの未来がある。

クリスも同じ。

少しずつ、彼女も自分の道を、進むべき道を見出しつつある。

まだ、それはぼんやりとしているもので、実態はつかめていないだろう。

だけど、それでも、やがて答えにたどり着くだろう。

そして、その道を歩き出す。

未来のある二人。

だけど、僕にはない。

許されない。

咎人に未来なんてあるはずがない。

あるとするならば、それは終焉だけ。

死のみ。

暗き深い深い闇の中に帰ることしか許されない。

だけど、それでも、今はまだ……

「死ねないんだよな」

剣をそつと出して、構える。

そう、僕はまだ死ねない。

いつかは、死なないといけない。

その期限は明確じゃない。

だけど、いつかやってくる。

彼女たちが僕の元を巣立つとき。

そのときが、僕の終わりの時。

僕が深い闇に帰るとき。

それは、抗えないことで、抗うつもりもないこと。

でも、そのときが来るまでは、死ねない。

だから、抗う。

僕を殺そうとするものに抗う。

「暗き闇の中で眠れ」

ぼつりとつぶやく言葉。

それは、魔法の言葉。

詠唱のようで詠唱ではない言葉。

『滅衝斬』

暗き闇の斬撃を放つための言葉。

なくてもかまわない。

だけど、威力を込めるためにはその言葉をつむぐのが一番。

それに何より、僕自身がその言葉を気に入っている。

何も言わずに使うよりも、少しは格好よく見えるし、何より……

残っている相手に対するプレッシャーにもなるし。

「さて、次に死にたい人は誰ですか？」

そつと周りを見回す。

気配の数は割りと多い。

人一人を殺すために集めてきた人数にしては、むしろ多すぎるだろう。

だけど、僕を殺すための人数にしてはあまりにも少なすぎる。

僕の力を過小評価しているのか、それとも、彼らの力を過大評価しているのか、それとは別に何か策でもあるのか。

それはわからないが、やることはひとつ。

すつと前に出てくる黒装束の人間を切り捨てる。

以前のように血液自体に呪いをかけている可能性もあるから、返り血は絶対に浴びないようにする。

まあ、普通に戦っていれば、返り血なんて浴びやしないが。

「その、程度で……！」

さらに、背後に回ってきた二人を切り捨てる。

敵の背後を取るのは定石。

とつたら、確実に優位に立てる。

だけど、力量に差がありすぎれば、それも無意味。

反応できれば、結局背後かそうじゃないかなんて関係ない。

特に彼らと僕ほどの力の差があれば、なお更だ。

意味などありやしない。

「無駄なことだとわかっているだろうに、それでもくるのだな」

それは、単調な作業。

向かってくる相手をただ切り捨てるだけの作業。

こんなことをしたところで、僕にとっても、彼らにとっても意味はない。

ただ、僕は相手を殺すだけ。

彼らは、ただ死ぬだけ。

なんの意味もない。

ただただ無駄なこと。

「後は、残るのは君一人だけど、どうする？」

そして、最後の一人。

地に転がる無数の死体。

ざっと40人強と言ったところだろう。

白銀の甲冑を着ている人間もいるところからすると、軍部でも十分力のある騎士もいたんだろうが、やはり化け物相手では無意味と言ったところだろう。

最低でも僕に手傷を負わせるんだったら、一個中隊ぐらいはつれてこないと。

この程度なら、肩慣らしにもなりやしない。

「聞く耳持たず、か」

こっそりと隠れるようにして木の陰にいたものは、そのまま呪文の詠唱を始めた。

彼もまた、死に急ぐつもりらしい。

なら、さっさと終わらせてやろう。

ひとつ跳びで間合いを詰める。

それと同時に相手の詠唱も終わるが、発動はしない。

発動するよりも僕の剣の方が早かった。

あつさりと首が吹き飛び、無様にその場に倒れこむ。
これで終わり。

空しさだけが残る虐殺の終わり。

けれど、不意にいやなおいを感じた。

実際には何の匂いもしないのだけれども、勘とも言える感覚が体に襲う。

反射的にその場から飛びのき、さらに結界をまとう。

それとほぼ同じタイミング。

ほんの少しだけ遅れて、爆ぜた。

無様に倒れこんだ死体が。

無残に地に転がっている無数の死体が。

次々と爆ぜ、血の雨を降らせる。

血が降った所は次々と黒く染まってゆく。

それは、やはり呪い。

また、同じ呪い。

けれど、今回は以前に比べ物にならないほど卑劣な呪い。

捨て駒をこれだけ集めての、全ての人間を最初から死なせること前提の呪い。

吐き気がした。

ここまで、するとは思わなかった。

ここままでして、僕を殺そうとするとは思わなかった。

こんな卑劣な手段を使ってまで殺そうとするなんて思わなかった。

「クリスがいやになったのがよくわかる」

どこまでも薄汚れた世界。

自分たち以外の人間とは勘定していないのだろう。

ただの駒としか考えていない。

何の情も持たず、ただごみのように扱う。

それは、決してかつて僕が敵対していたものとなんら変わらない。

結局、力の大小の問題があっただけで、根本的なものは変わらない。
どちらであっても、まともなものもいれば、くずみたいなものもい

る。

そういうことだったのだろう。

爆発が終わったのを確認すると、場を清める。

呪いの力は割りといひどいから、完全に回復するには多少時間がかかるだろうが、地脈をいじれば、それもすぐによくなるだろう。

本当に、自分の領内でやらずによかった。

もし、そこでやってたら、どうしても後が残る以上、余計な心配をさせかねない。

早めに対処しておいて本当によかった。

僕は、その場を後にした。

「アリス、貴女、何を見ているのかしら？」

「貴女には関係ありません」

深い深い漆黒の闇の中、ようやく目を覚ましたクリスがそういつてくるが、ぴしゃりと切り捨てる。

今、気にすべきことは、こんな女じゃない。

むしろ、こんな状況にさせてしまった女のことなんて、憎む以外できやしない。

今、この家にはルイさんはいない。

そして、領外から感じたかすかな戦闘の気配。

それが明かすのは、簡単なこと。

また、ルイさんが戦っているのだ。

そして、その原因は今ようやく起きてきた女。

クリスのせい。

彼女が来てからは、よくルイさんは夜に外に出る。

そして、たくさんの人を殺してくる。

深い深い悲しみをその瞳たたえて、深い深い絶望をその心に刻み付けて。

だけど、それに私は何も言えないでいる。

それを知られたくないから。

かたくなにそれを隠そうとしているから。

だから、私は聞けないでいる。

だから、私は結局馬鹿な子を演じるしかない。

本当は、ルイさんの地獄のような特訓を切望しているのに、ただの女の子みたいに、それを嫌がるふりをする。

彼の近くにいたいのに、彼の足手まといにならないようにしたいのに、それをしたがらないように振舞う。

おろかな役者。

それもこれも、やはりこの女のせい。

戦闘の気配が消えた。

どうやら、終わったみたいだ。

「私は寝ます。貴女もさっさと寝たほうがいいですよ。おやすみなさい」

すぐに、ルイさんが帰ってくるだろう。

となると、私が起きているのはまずい。

また、余計な気苦労をかけかねない。

状況のわかっていない彼女をほうって、私は自分の部屋に戻ると布団の中にもぐりこんだ。

第八話 他称勇者の苦悩と魔王の憎悪（後書き）

どんどん短くなっていきます。

そして、どんどんメインが壊れていきます。

どんどん汚くなっていきます。

怖いです。

でも、そこが好きです。

第九話 少しずつれた多少勇者の家族団樂（前書き）

ずいぶんと久しぶりになってすみません。

ネタが枯渇して、おまけに別のものを書いたりと……

とりあえず、ぽつぽつと書いていきますので、ご容赦を。

第九話 少しずれた多少勇者の家族団欒

「自慢の白亜隊も全滅か」

近衛隊隊長から、聞いた言葉は、勝利報告とはいかなかったようだ。

「しかし、それも想定のうち」

だが、それも予測済み。

所詮、白亜隊といっても、人間。

中級魔族ならなんとかなるだろうが、魔王クラスでは、どうしようもない。

それぞれ、人には分がある。

「そうやって、虐殺してゆくがいい」

それでも、私は、これからも送り続ける。

幾多もの兵士の命を捨てる。

それが、王としての使命。

王としての責務。

「そして、新たな魔王となるがいい」

すべてのピースは揃っていく。

彼らが考えたとおりに物事が進んでいく。

まあ、そうでなくては困る。

そのための娘いけにえなのだから。

わざわざ決まりかけていた王位継承者を捨てたのだ、予定通りでなくは困る。

求めるものはただ一つ。

神の庇護。

「ルイさん、デートに行きましょう」

「ふむ、そんなに訓練はいやか？」

訓練をサボる口実としては、あまりに上手ではない。

「違いますよ。ルイさんにちよつとだけお休みを上げたいな、と思

いまして。どこかの誰かさんがルイさんに負担をかけてますから」

「あら、それはいつたい誰の事かしら？」

にゅっと出てきたのは、クリスだ。

どうやら、聞き耳を立てていたみたいだ。

「うん、確かに、そのどこかの誰かさんは、料理は壊滅的に駄目だし、他の家事も、大惨事というか、女として生まれてきたことを世界中の女性の皆さんに謝りなさい、といったくなるほど、おかげで僕もかなりしんどい思いをしているけど、我慢できないほどじゃないぞ？」

「大丈夫、私は床じょう……」

「それ以上無駄口をたたくと、炙り焼きにするぞ」

睨みつけると、闇色をした炎を呼び出す。

全く、純情な乙女がいるというのに、なんという言葉を言おうとしているのだろうか。

そもそも、淑女たるべき王族がそんなはしたない下々のネタを言うなんていうのは、程度が知れる。

「でも、ルイだって、愛し合う時には、そっちの方がいいでしょう？」

「どちらにしろ、情勢が情勢だから、ちゃんと訓練はした方がいいだろう」

「あら、無視なの？ ひどい人ね」

とりあえず、鬱陶しいんだから仕方ない。

「こういう情勢だから、です。ルイさんは、最近笑えてません。だから、デートに行きましょう」

「あー、うん、それは、まあ、うん」

確かにアリスの言うとおり、笑えてはいない。

ここ最近、もう自分でも数えるのが馬鹿らしくなるほど人を殺した。さすがに、そんな状態で笑えるほど、精神異常なわけでもない。

「というわけで、行きましょう」

「……まあ、ここは、仕方ない、かな」

確かに情勢は良くないが、差し迫った状況というわけでもない。

まだ、戦火は及んでいないし、不平不満を言いながらも、まじめに訓練をしているから、ずいぶんとアリスは強くなった。

まあ、それでも、戦えるほどではないけれど。

ようやく、基礎を抜け出そうとしているぐらいだし。

それでも、雑兵程度な相手なら、自分の身を守れるぐらいの強さは持っている。

たまには、ご褒美もいいだろう。

「んじゃ、どこに行く？」

「シボアの滝に行きませんか？」

「ああ、あそこは、確かにデートにはうってつけだな」

ここから、飛行の魔法を使ったら二時間ほどで着く場所で、大きな滝とその裾に広がる滝壺とそれを囲む木々が茂り、静かでいい場所だ。

「今から、お弁当を作りますね」

「なら、僕は出かける準備をしておこう」

「じゃあ、私は、勝負下着を準備しておくわ」

『しなくてもいい、というか来なくてもいい!!』

僕とアリスの声が重なった。

本当に、どこまでネジが緩んでいるんだろうか。

準備を終えると、僕たちはシボアの滝へと向かった。

とりあえず、クリスに関しては、魔法で拘束して、納屋に押し込んでおいた。

まあ、時限式で、しばらくしたら拘束が取れるようにはしているから、まあ、大丈夫だろう。

「あ、あの、その、すつごく重いですけど」

「そうかな？」

「はい、すつごく重いです。というか、100キロを超える重りを背負って重たくないはずがないじゃないですか!!」

「でも、僕、その倍の荷物を持つてるけど？」

「ルイさんを基準で考えないでください」

まあ、確かに、僕基準で物事を考えると、どれもこれもがおかしな話になるから、やめるべきだろうとは思いつし、実際は、かなり厳しいことをしているなとは思っている。

今、彼女は通常の荷物プラスに訓練用の重り100キロを担いで飛んでいる。

常識的に考えたら無茶もいいところだ。

「でも、強くなるんだったら、これぐらいしないとな」

でも、僕はそういつてにつこりと笑う。

無茶なのは確かだけど、それでも、これぐらいならまだ楽なものだ。

「うー、せっかくのデートなのに」

「デート中でもがんばる君はすごく素敵だと思うよ」

そういつて、につこりと笑う。

「ごまかしてます？」

「まさか、それより、もうそろそろでつくはずだから、スピードをあげようか」

「ええ！！ここでラストスパートですか！？」

「ゴー」

「ま、待つてくださいー！！」

彼女の叫びは無視して、スピードアップ。

後ろにいる彼女を眺めていると、半泣きになっている。

なんだか、その表情がとてもかわいらしい。

ささくれ立っていた自分の心も、落ち着きを取り戻している。

それもこれも彼女のおかげだろう。

彼女のお誘いがなければ、こんな気持ちになりはしなかっただろう。本当にいい子だ。

今度何かプレゼントしてやろう。

ようやく、目的地のシボアの滝につくと、手早く準備をしていく。

やるのは僕一人だけだ。

アリスは完全に、ダウンしている。

まあ、自分でも無茶させているのがよくわかってるので、それに
対して、何かを言うつもりはない。

「……手伝いサボる子には弁当なしにしようかな」

「ふえ！？」

そう、訓練にダウンしてることには文句は言わない。
ただ、それだけだ。

「ひどいです。鬼です。鬼がここにいます」

「鬼、ねえ。なら、今度の訓練はもつと厳しく……」

「ごめんなさい。手伝いますから、手伝いますから」
ほとんど泣きながら、立ち上がる。

完全に疲れきつていて、ふらふらとしている。

まあ、仕方ないだろう。

「冗談だよ。そこでゆつくりと休んでいて」

彼女をそつと座らせると、作業に戻る。

いくら僕だって、そこまで鬼じゃない。

準備を終わらせると、お弁当を開く。

色とりどりのおいしそうなおかずが並んでいる。

「さすが、アリス。本当に上手になったね。」

なんというか、カラフルでファンシーで女の子のお弁当、と言う感
じだ。

「そして、これは、廃棄処分、と」

そのわきに堂々と置かれている毒物を取りわけ。

誰が作ったのかなんて一目瞭然だ。

クリスが作ったんだろうが、とりあえず、人が食べられそうなもの
ではない。

修羅の道を歩んだが故に、研ぎ澄まされた生存本能が警笛を鳴らし
ている。

それを食べたら、死ぬぞ、と。

「はい、あーん」

そんな劇物を意識の外に外すと、つまんだ玉子焼きを差し出す。

「ふ、ふえ！？」

「だから、あーん」

「え、ふえええええ」

何故かアリスをパニックを起こした。

「どうかした？」

けれど、なぜ、そんなに照れるのかわからない。

たかだか、あーんをするぐらいで、なんでそんなに照れるのだろうか。

「い、いえ、その、あの、ど、どうして、その、あーん、なんですか？」

「え？普通じゃないのか？僕は昔、よくやってたけど」

ずいぶんと昔の話になるけど、家族や恋人とピクニックをしたときはよくやってた。

こんなことぐらい仲が良ければ普通にする。

まあ、あくまでも仲が良ければ、だけど。

「そ、そうなんですか？」

「そうだよ。だから、はい。あーん」

再び、そつと差し出す。

「う、うう、あ、あーん」

相変わらず照れながらも、今度はしっかりと食べてくれた。

その姿は非常にかわいらしい。

うんうん、やっぱり家族団欒はこれに限る。

僕と彼女は、二人で食べさしあって、綺麗に弁当を間食したのだった。

「いつまで、私は縛られていなければならないのかしらねえ」

今の私は、魔法の縄で縛りつけられて、芋虫のごとく転がっている。その姿はどこにも王族の威厳なんてない。

まあ、私自身そんなものには、愛想がつきてるからかまわないんだけど、ただ、それよりもかなり重要な案件がある。

「トイレはどうすればいいのかしらねえ」

さすがに粗相をするようなまねはしたくない。

果たして、どうすればいいのか。

「まあ、その時はその時で、責任とってもらえばいいわけだけど」
男らしい責任の取り方、というやつで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0545d/>

トリプルクラウン

2010年10月30日19時15分発行